



今月の編集—あこら大阪

196号

「住職」を追われた女住職

一向一揆のパワーを今一度——藤谷不三枝
植えつけられた“人格の身分制度”のなかで——渡辺智子
女住職への遠い道——伊藤景子
蓮月尼の「課題」を共に……——村田みつる
スパッツをはいた女性僧侶——大音美弥子
魅せられて——小谷訓子
会ってこそ伝わる人柄——山際美代子
蓮月さんの課題——山田和枝
会って感激——山本瑛子
今度は部落問題を話し合いたい——吉田悠子

〈あこらめいと〉はんなりと人を包みこむ——澤田和子さん
〈連載〉伊丹十三のポストモダン映画(II) ブリンドル玉枝
〈連載〉ペルーの女は立ち上がった(II) C. アンドレアス 訳 S. サカモト
〈連載〉看護婦・光と影 ⑭ 増田れい子



蓮月尼の「課題」を共に……

村田 みつる

人間も動物も、すべて生あるものとして受け容れる仏教は、男女平等についてもキリスト教などに比べると進んでいると言われる。

神父には女性はないが、一寺を守る女性は、少なくはない。

その仏教の中でも、東本願寺を本山とし、親鸞を宗祖とするだけに、真宗大谷派は、さぞ民主的と思われるが、そこにも底深い差別はあった。

その中であつて、〈あこら〉の会員、羽向喜久子さんと藤谷不三枝さんたちが根気強い努力を重ねられた経過は、「あこら」一二九号、一三〇号「真宗大谷派における女性差別Ⅰ、Ⅱ」(一九八八年四月号、五月号)でご記憶の方も多いと思う。

努力が実つて、女性も一九九一年七月「住職」に就けることになり、九二年、三人の女性住職が誕生したが、現実に「住職」の地位を得ることになった藤谷さんに対して、主力檀家を中心とする根強い反対が起こり、苦闘を続けている。この号には、その藤谷さん(蓮月尼)の手記と、それをめぐる意見のいくつかを紹介した。

「善人なおもて往生を遂ぐ」と説き、「非僧非俗」と自らを名づけた親鸞は、普通の家庭生活を「行」と考え、人とのつながりの中で「共に生きる」自己実現を目指した。その教えは門徒の中にさえも、たしかには根づかなかつたのだろうか。仏教は在つても仏教者は滅びたのだろうか。

いつの頃からか家制度とも深く結びついた仏教は、どの宗派も、残念ながら、宗教の原点から外れたように見える。藤谷さんの「課題」は、現代に生きる私たちの「課題」でもある。

目次

巻頭言 蓮月尼の「課題」を共に…… 村田みつる 1

一向一揆のパワーを今一度！ 藤谷不三枝 5

植えつけられた“人格の身分制度”のなかで 渡辺智子 54

女住職への遠い道 伊藤景子 58

蓮月さんと出会う 澤田和子 65

スパッツをはいた女性僧侶 大音美弥子 67

魅せられて 小谷訓子 68

会ってこそ伝わる人柄 山際美代子 70

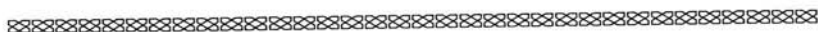
蓮月さんの課題 山田和枝 72

会って感激 山本瑛子 73

今度は部落問題を話し合いたい 吉田悠子 73

蓮月さんのお話を聞いて

集会から 文玉珠さんの貯金を返して！ 高野ゆう子	75
めじやーなりすとのめ 探偵小説の女性主人公 平尾幸子	76
気になる英語 アパルトヘイトⅠ 奥川 睦	78
『連載』伊丹十三のポストモダン映画Ⅱ	
2 タンポポ プリンドル玉枝	80
あこら試写室 妻はフィリピーナ	90
『連載』ペルーの女は立ち上がったⅡ	
序章2	
キャロル アンドレアス	
訳 サンディサカモト	92
あこらめいと はんなりと人を包みこむ 澤田和子さん	100
看護婦 光と影（14） 小西洋子さん（2） 増田れい子	102
あこら読書室	107
北京会議情報―総理府 NEWS LETTER No.1から	108
あこらのあこら	112



「住職」を追われた女住職

——蓮月尼の反乱——を考える——

蓮月尼——藤谷不三枝さん。写真のようなルックス。ナウイ。率直。イヤなものはイヤ、ダメなものはダメ、と言い続ける。したがって波瀾万丈……。『フライデー』にも『アエラ』にも取り上げられた。マスメディアが取り上げたくなるヒトである。彼女は何を言いたいのか。まずは彼女の主張に耳を傾けよう。

そして、彼女に会った人、話を聞いた人、意見を読んだ人、それぞれの声を聞こう。



“型破り” 女性僧侶が 住職目指し奮闘中

刈り上げにサングラスという出で立ちのこの女性は、大阪・守口市の覚了寺の副住職・藤谷蓮月さん（39）。檀家総会で住職就任が拒否されたが、「時間をかけてわかってもらう」と本誌に訴えた。

【フライデー】1992年12月4日号より

一向一揆のパワーを今一度！

——蓮月尼の解放論——

藤 谷 不三枝

はじめに

悪人とされてきた民衆と共に生きた親鸞に共鳴した私が、その願いを、覺了寺を足場として展開してきて十三年になる。

ところが、一九九一年十二月、住職である父が亡くなって以後、村の「有力檀家」や地域の住職から、以前にも増して圧力がかけられるようになった。そして九二年十月、「有力檀家」の一部によつて画策された一方的「門徒総会」で、私の住職就任と法務を拒否する決議をあげるといふ事態が起こった。実際に起こったこの出来事によつて引き起こされた私の問題意識から、私なりの解放論を展開したい。

かつて親鸞は、最底辺で苦しむ民衆と共に動乱の時代を生き抜き、社会的にさげすまれた

人々こそが真つ先に救われるべきだと説いた。にもかかわらず、その親鸞を宗祖に掲げる真宗大谷派は、歎異（真実と異なっていることを歎く）の精神も忘れて、親鸞の銅像を祭つて權威づけ、大伽藍（建物）を誇つてゐる。その「末寺」に住む私が、お布施と引き換えに「檀家」（パトロン）や教団の言いなりになることを拒否し、教団の男支配の実態や古い因習的村社会のありさまを批判することで、地域を牛耳るボスの住職や「有力檀家」から「いじめ」にあうのも、当然と言えば当然のことかもしれない。これはまた単に一宗派内、一地域内のことにとどまらず、むしろ社会の縮図としてまた家族のあり方を問うものとして私たちの問題にしていることである。どうやら人間を解放するはず（？）の宗教は、実は冠婚葬祭という儀式を通じて、現実の支配差別を再生産しているようだ。日本全体が一つの閉鎖的村落共同体といえる状況の中で、人間を縛つてくる「宗教」からいかに解放されうるか、性差別を問う立場から、寺檀制度の解体論等を語りたい。

寺を継いだわたし

私は、大阪の真宗大谷派の寺に居て法務に携わっている女の僧侶。法名は蓮月。自分で付けた名前である。「不三枝」は親が付けた名前だし、「藤谷」は家名だから「家」をひきずっている。そういう意味では、自分で選び取った「蓮月」の名は大事にしている。（ただし一般には、誰か住職に付けてもらつて授かるのがほとんどだから、意味が違う。）「○○さんの奥さん」でも「おばさん」でもない、この世でたった一人の自分であることを誇りたい、そんな私の、最

近に起こった出来事を中心に話を聞いてください。

覺了寺というお寺に生まれ、末っ子だったので、自分はお寺関係ないわと思つてきたのだが、兄が、ある日「継がない」と宣言し、コンピュータ関係の道に進んでしまったことから、私が両親を手伝うはめになったのである。失恋がきっかけで自立したくて、寺を四年ほど出ていたのだが、父であり住職である大円さんの胃潰瘍再発を機に帰つて来た。これという特技を持たない自分の将来への不安が、実際は大きかったと思う。で、得度をするのだが、「あくまで手伝うためで、決して跡を継ぐとかじゃないからね」と、親に念を押したのを覚えてる。

さて、いざお参りを始めてみると、留守の家でお勤めしなければならなかったり、家人が隣の部屋でテレビを見ていたりで、「何でこんなことになつてんのやろ」と、不思議に思うことばかりだった。いわば好きでやつているというより、抜き差しならない状態で放つとけなくて泥沼のように足を突っ込んでしまった、というのが真相である。

で、もつと学びたいと思い、教師資格を取ろうと、三か月間、今度は朝から晩まで勉強に打ち込んだ。その中で、動乱の鎌倉時代に、社会的に疎外され「悪人」とされていた被差別民衆と共に悩み生き抜いた親鸞の魂に触れ、感動したのである。私の中で眠っていた魂をつき動かすものが、そこには確かにあった。

資格取得後、また、元の法務に戻った生活が始まるが、しかし深く関われば関わるほど、親鸞の生きざまと、今の真宗の寺の現実との落差に愕然とさせられることになる。私にとって第一の問題は「お参り」だった。

お参り——そういう習慣のない地域の人にとっては、何のことかわからないだろうが、毎月

先祖の命日に、僧侶が各「檀家」をたずねてお勤めなり読経をする仕事で、いわゆる月「忌」参りという。日本人の先祖観と言えるが、亡くなった先祖の「霊」が迷つて、行くところに行つてないのではないかという、実は生きているものの迷いなのだが、その結果、僧侶という「専門家」にお経を上げてもらう、ということになる。いわばお経は「厄を祓う呪文」というわけだ。私が「忌」（いみきらう）を「」で囲むのも、そんな問題性をはつきりさせるためである。

私の母の父が住職だった五十数年前に、大円さんが飛驒の田舎から「養子」としてやつて来たのだが、その頃などは月に十回その月「忌」参りがあるところもあったという。わずか百軒ほどの「檀家」数でも、住職だった私の祖父は、朝から晩まで月「忌」参りに走り回り、勉強する時間はなかった。死ぬ前日、大円さんが、ストリートにも「明日の朝までもたへんやろ、とお医者さんが言われました」と告げると、祖父は「そうか、そしたら卵かけご飯をくれるか」というので父が差し出すと、本当においしそうに少し食べたという。そして今度はお聖教（聖典）を手にもたせると、「ああ、これでゆつくりお聖教が読める！　ありがとう、ありがとう！」と言つて、間もなく亡くなつたそうだ。父、大円さんも、月「忌」参りの習慣がない田舎からやつて来て、あまりのお参りの多さに戸惑い、自分は「お経の配達人」か、と悩んだのだった。ついに、某お参り先で「数を減らしてほしい」と申し出たところ、「坊さんのほうからそんなことを言うとは！」とえらく叩かれ、それ以来、二度と言うまい、と思つたという。

「女性住職」の称号を得る

私がやり始めた頃でも、月五、六回参る所は何軒かあつた。両親とも風邪で寝込んだ日曜などは、二十数軒参る時もあつた。当然、しかし徐々にだが、私はお参りの数を減らし始めた。そして、人に伝えたいこと、伝えずにはおれないことを書いて、寺報として出し始めた。題は「親鸞だよネ」。現在は「活々」(きき)という題で隔月くらいに発行している。

そのような日常の法務の中で、さまざまな提起と改革は試みてきた。(とは言つても、私には自然で当たり前のことをしたにすぎなかつたが――)。

当然「説教師」の人選も違つてきた。権威主義的で浪花節調で聞かせる、華やかなスター的僧侶から、地味でも親鸞の精神に帰ろうと、ただ願つて話す僧侶に変わつてきた。

両親は、世代の相違から、また村社会の難しさから、私に時々「○○するな」「こんなことは書くな」と制限を加えながらも、実質住職を譲つたつもりで、高齢でもあり、ホツとしていようだつた。十年前になるが、母親綾子さんが亡くなり、その後は大円さんと二人で寺に暮らしながら法務をやつてきていた。

ところで、女性に住職の座を認めてこなかつた大谷派教団で、制限付きで認めるという条例改定をしたのは、一九九一年七月からである。それはしかし世襲性を温存し、やがては跡を継ぐ男に手渡すための中継ぎ役としての住職代理にすぎなかつたのだが、それは問題にしていゝとして、ともかく一九九二年に入つて女性住職は三人誕生した。

私も曲がりなりにも法務をして十三年、そして近年は病気で高齢の父・住職に代わつて実質住職として、寺を寺檀関係を越えて民衆の解放区にと、自分なりにやつてきたのであるが、権力からの弾圧を受け、流罪にあい、怒りを持つて権力を告発した宗祖親鸞の精神に帰ろうとす

ればするほど、また女の視点で男社会を告発すればするほど、地元の権力者とも、そして世襲制に居座り、寺の「長男」に生まれたがゆえに「若さん」と呼ばれ、衣の色・寺の格・本堂内陣での席順を競い合っていた男住職たちともぶつかり、圧力がかけられるようになったのは、当然の成り行きといえるだろう。

「変成男子」の思想にとまどいつつ

今から思えば、相当無理をして住職らとのおつきあいに合わせてきたと思う。例えば、地域の十カ寺が「報恩講」という法要をお互い参り合ひするのだが、お勤めの出番を待つ間の座敷では、「上座」「下座」の序列が自然と決まっていて、おまけに下劣な話題に興じる住職たちに同座するのは、もちろん気分の良いものではなかった。しかし、内心不快な思いを持ちながら、当然これからは、他の住職たちとも肩を並べてお付き合ひをしていなくては、と思っていた私は、恥ずかしくも少々猥談にも合わせて笑っていた。そしてそこへ、着物を着た坊主さん（住職の妻）が、静々とお茶を出してくるという構図……。いわば、私は、坊主さんにお茶をさし出される側にいるということだったのだ。

仏教がもたらした「変成男子」思想は、法華経の中の「良家の出」である竜王の娘の成仏の物語に発するが、大衆の眼前で女性の性器が消え、男性の性器が生じて仏となったことが説かれていて、女が女のままで救われず、いったん男になつて救われていくというもののだが、女の側から言えば、「男の論理に合わせることでやつと認めてもらえる」と言い換えられるし、

男の側から言えば、「男と同等にやつてみる、なら認めてやる」ということだ。その意味では、その時点での私は、男住職たちからみて、マアマア合格(?)か、認めざるを得なかったのだと思うが……。

報恩講の時、外陣(参詣の昼の間)にいる門徒の人たちにとつて、また内陣(僧侶が読経する一段高い昼の間)出仕をしない坊守さんから見れば、住職たちは何かエラク難しい、大変なお仕事をしているようにみえるが、実はすごい上げ底なのだ。例えば報恩講の出仕前の座敷での会話である。「せやけどホンマ、葬式いうのは眠たいもんやなあ!」「○○寺さん(住職というのは、お互いこう呼び合うのである)は、その間寝るのが得意やで」「お勤めの間寝てもてな、自分で打つ最後のおリンの音でハッと目覚めんねん」

さて、出番である。声明(お勤め)の上手な者は、ここぞとばかり超スピードで「うわんうわんむにやむにや」とやらかし、何を言ってるかわからない。大半の住職はわからないんじゃないかと思うが、時々おリンを打つ所で「あつ、ここか……!」とわかつて、行き過ぎてたり遅かったりを調節するのである。とにかく自分の読める最高のスピードで読まないといけないし、こんなことは「行」ではなく、「芸」であり「ゲーム」である。(若手の新米住職らにとつては、「先輩」住職らにいじめられぬよう、仲間に入れてもらうための「行」かもしれないが……そうやって「一人前」の住職になつていくのだ!)

音程の高さも今はさすがに鍛えられて(!)出せるようになってきたが、それはともかくも、正しく「変成男子」、男の音程に合わせてカナキリ声を発しなければならず、必死の思いをしてきたというわけである。

エロにも時にはつきあつて

さて、全十カ寺が報恩講を終える年末には「慰労会」と称する「忘年会」にも出掛けた。すると、ミナミの繁華街を歩く道で一人の住職が皆に葉巻を配つて「オイ、吸え吸え！」と言う。坊主頭のハカマ姿でミナミを闊歩すると、「呼びコミ」のお兄さんらが注目して「どつかの組の一団かな？」と見てくれるのが快感というわけだ。

が、それにもまして、某スナックに入るや否や、ママさんが「いらつしやい！」と言つて、いきなりお乳をポロツと出すのにはア然とさせられた。そして、し尿瓶にビールを入れ、回し飲む。その後はエエ調子でカラオケである。その間中も、ママさんは度々お乳をポロツと出すパフオーマンスを繰り返すのである。私はそれでも、今後も付き合つていかなければと、必死で合わせていたのだが、我慢できずにカラオケの途中、年配の住職二人と共に引き上げた。「エッ、もう帰るの？」という声を後に……。帰路のタクシーの中、「もうあれ以上は付き合われへんな」と、ため息まじりに首を横に振る老住職たちに、せめてもの共通感覚を抱けてホッとした私だった――。

住職らのそれぞれの妻である坊主が、夫である住職のこのような実態を許している現状は、なかなか変わらうとはしない。なぜなら、男性の講師が「真宗の女性観」というテーマで、男の都合で決める「良き坊主像」を、いまだに植え続けているからである。

父を亡くしたあとの外庄

さて一九九〇年の覚了寺の「報恩講」をきっかけに四方八方から圧力がかかるようになってきた。

「報恩講」は真宗の最大行事だが、教団にあげる金次第で、地域の住職たちの座る場所や衣の色まできつちりと決まっていて、僧侶の人格とは何の関係もない。男同士の見栄の張り合い、力関係に我慢できなくなつた私が、ついに、その序列を崩したことが彼等の反発をかい、大半の住職が覚了寺への参加をボイコットするようになってきた。また父・住職が亡くなり、私一人になつたことも大きな引き金となつたようだ。

父が一九九一年十二月五日に亡くなつた後も「檀家」総代が私を継承者として認めず、ハンコを押さないために制度上の住職になれずにきたのだが、事態はもつと複雑な状況になつてきた。

私も最初は「まあいいや」とうつちやつておいた。ちょうどその頃ドイツで働いている友人が得度をしたいということで、得度講習を受けるため九二年三月末に帰国予定をしていた。私も簡単に考えていたところ、大阪教務所から代務者届けをしないと、彼女が覚了寺を所属寺として得度ができない、と言われた。あわてた私は国際電話で事情を話したところ、意外と落ち着き払つて彼女はこう言つたのだつた。「そうかそんなことだろうね。私の得度は今はいいわ。どこの寺でもいいというわけでなくて、覚了寺を所属寺とすることに意味があるのだから。それより不三枝さん、住職になれるようがんばつて」と逆に私を励ましてくれた。そして後日私

を含めた日本の友人たちへ、次のような手紙を送ったのだ。

日本の仏教者は死んだ

ここ数年来の願いであった、得度をするという目的達成のため帰国を予定していましたが、今回は、断念することになりました。なぜ得度をしたいかという気持ちにさせられた「現代の日本仏教における問題点」が、早速、待つてましたとばかりに現れました。

得度とは、仏陀（ゴータマ・ブツダ）の説いた教えを受け入れます、つまり仏の教えに帰依します、という以上の意味は、私にはありません。私が仏教に今のように深く関心を持ち出したのは、ドイツに来てからです。寺を中心とした日本仏教について知り始めると、もはや問題だらけ、救いようがないくらいになっていきます。仏教が死んだのではなく、仏教者が死んでいるのです。

仏教は人間の一人一人が内に持つ無限の可能性に気づかせるすばらしい教えですが、仏教者が全くその教えを理解していません。頭の中だけの理解に終わっています。理屈をこねまわして文面や語句を解釈し、あれこれ口先で論議し、それだけになっています。

本来、宗教は実践なくして何の意味もありません。宗教とは、日常生活においての物の考え方、捉え方、極端に言えば口のきき方、体の動かし方です。像を作つて拝むことでもなく、寺を作つて権威を誇ることもなく、儀式のみに囚われることでもなく、ただただ教えを理解し、日々の生活の中で実践していくことが、その教えを知ることと言えます。

大乘仏教全体から眺めたとき、私が得度しようと思つている浄土真宗は、私にとつてはか

なりおもしろくなく退屈です。しかし、この宗教によつて、初めて仏教は日本では在家のものになり、普通の人々のものになりました。が、同時にそれのために、非常に残念ながら、本来のすばらしい教えが世襲制となつた寺制度と檀家制度の下で、形だけのものになり、死んでしまいました。

得度するにあつて、所詮は巨像に蟻の挑戦ですが、何もしないよりも良い、という私の考えに従い、守口市の大谷派に属する覚了寺を所屬寺としてお願いしていました。そこで生まれ、副住職として働きつつ、かなり過激に反体制的な活動を続けている女性僧侶の蓮月さんや、他の人々に、ドイツにいなが加わることを考えました。それ以外には、本当に、教えに帰依するというだけの意味しかありません。

仏教は本来一つの教えですが、一人一人の解釈の違いによつて幾らでも宗派ができて争っているのが、日本の現実です。そんな現状を、ただ受け入れるための得度など全く必要性がありません。仏教を生かすための活動をせずして僧籍をとることなど無駄です。得度することによつて得られる現世利益などまつたくなのですから。

やつとここで、なぜ今回得度を断念したかの説明になりますが、昨年十二月に、住職だった蓮月尼の父上の大円和尚さんが亡くなりました。その後、寺の代表である住職または代務者として、彼女を檀家総代が認めません。総代が認めないと住職や代務者とはなれません。女性であること、その女性という分際でありながら反体制活動をやっていることが気に入らないのです。男ならまあしょうがないという部分もあるらしく、これまで今回のようなケースはないのです。この檀家制度は、仏教の目指すところから見ると弊害あつて一利なしで

す。とあれ、代表者のいない寺は、寺として不完全にしか機能できませんから、その寺を所属寺として得度はできないわけです。

今後この覚了寺の問題がどうなるのかわかりません。まったく前例がないのです。いずれ、私の得度に関しては手が見つかるでしょう。もつとも得度する目的がばれたら無理かもしれませんが。

「五十八万円が父の命の代償」に奮起

私が覚了寺の代表者として認められないことの及ぼす影響は、もう一つあった。住職であった父大円さんが亡くなったことで、遺族給付金が五十万、弔慰金が大阪教区と教団から各八万円ずつ出るのが、教団からの八万円がおりないというのだ。「なぜですか」と問う私に、教区の担当者は気の毒そうに、「遺族給付金や大阪教区の共済から出る弔慰金は、個人のものとして出るのですが、『本山』の共済から出る弔慰金は、その寺におりるもので『代表者』を決めないとおりにんですよ」と答えたのだった。たかが八万円受けるのに頭を下げられるかということで、この件は現在に至るまでそのままである。父が亡くなり、三か月も経過したころ、次のような物が送られて来た。一枚の表彰状であった。

「大阪教区第十二組／覚了寺住職／藤谷大円／特殊大功章／宗門護持の功労により右のとおり行賞する／平成三年十二月四日／宗務総長細川信元」

十二月四日、つまり父の亡くなった日の前日ということだ。死んでから位が上がつてはおか

しいので、日付を調節することで、生前に授かったことになるつてわけである。息を引き取るまでに娘に引き継がせられなかった無念さ、というよりも、死ぬまで降ろせない「住職」の重荷を引きずつて亡くなつていった父の命に対して払われた代償が、五十八万円とこの賞状であつた……。

これらのことをきつかけとして、私の中の何かがぶつつりと切れ、堰を切つたように「私たちの改造学——仏教の性差別」という文章を雑誌『労働情報』（一九九二年三月十五日号）に書いた。そしてそれはかなりの反響を呼んだのだつた。長くなるが、全文を次に掲載する。

「住職継承」認められず

「お兄さんが継いでくれやはつたらええのになあ！」

昨年十二月五日亡くなつた、住職である父の四十九日を済ませた月のある日、いつもごとく私に皮肉を言い、頭を悩ませる「檀家」の一女性から電話があつた。

年老いた両親をあくまで助けるため、法務を手伝い始めた私だが、あまりにひどい宗教現場の実態に、泥沼に足をつ込んだかのように抜き差しならなくなつて十三年たち、今に至るのだが、私の「住職継承」が認められずに行きづまつている。

民衆の只中に生きるといふ、本来あるべき僧侶の姿を回復していこうという意味では、自分なりに一生懸命やつて来たつもりだが、因習の中でどつぷりつかつて成り金的に、先祖の恩恵を受けて暮らしてきた地元の「檀家」とっては、「先祖供養」に不熱心で、男社会や

権力を批判するのに熱心な私は、村の秩序を乱し家庭の「和」を乱し、僧侶としての任務を果たさない、ふとどきな不良坊主なのだろう。

「……そんなに私がイヤですか……」

「お兄さんが継いでくれやはつたらええのにて、皆言うたはる」

「皆つて、一人ひとりに聞いたんですか？　自分がそう思つてゐるつて言つたらどうなんですか」

兄が寺を継がず、サラリーマンになつて二十年にもなるというのに、兄がどんな人間か、また、兄のことを好きかきらいかもわからずに彼女は言うのだ。彼女のみならず、「地元」ということを唯一の誇りとしている村人たちは、「皆言うている」という言葉をことごとく私に投げつけ、胃を痛ませる。

一方同じ「檀家」でも「地元」でない人の反応は全く違ふ。

「私ら住職さんが亡くならはつたんやから、当然副住職の蓮月さんが住職にならはるもんと思つてますけどねえ。いや、もうすでに實際なつたはりますやん」とある女性。

地域のうるさ型の連中とのいさかいは、もちろん今に始まつたことではない。僧侶になつたと同時に「親鸞だよネ」と題する新聞を出せば「アカみたい」、子供会を始めれば「本堂の畳が痛む」、庫裡（僧侶の住まい兼事務所）の修復にはストツプをかけ、契約を破棄させ、枯山水の庭園や自分たちの名前入りの記念碑には百万円だつてかける……。

一昨年、大分と神奈川の反原発グループが、大阪の「国際花と緑の博覧会」へ抗議に出かけるために、十日間にわたり本堂に泊まつた時は「檀家以外のものを泊めるな」と再三にわ

たつて警告し、まるで奄美大島の宇検村の住民による無我利追放や、熊本の波野村村民によるオウム真理教徒追放と同じ状況が引き起こされた。以後、「檀家以外の者に本堂を貸すときには、檀家総代の了承を得ること」と決めてしまった。（守つてないけどね！）

そして今、住職の継承問題である。大谷派が女性の住職を認めず、得度（僧侶として名づけること）の年齢まで、「男は九歳から女は二十歳から」と差をつけ、教団内の議会（六十数人くらいの議員で構成）も全部男で占めてきた問題性は、既に一般社会まで知れわたつてきた。昨年六月の議会では「該当する男子がいない時にのみ、配偶者か血を分けた娘が継ぐ」というように、世襲制を固定化する条例案が出された。さつそく、私たちは全国各地から「女性を含むすべての有教師に無条件で認めよ」と抗議したが、結局採択されてしまった。そのように問題があるとはいへ、ともかく私はその条件に該当するわけだが、住職どころか、従来から女でもなれた「代務者（住職代理）」という地位すら認められず、行きづまつてゐる――。

実は、父が亡くなる前の十一月、各地の講演先で、現在の葬式仏教を批判し、「亡き人をもどくように見送るのか、ひいては葬儀をどのように行うかについて、考えておかなければならない」と説いてきたのだった。そのわずか十日ほど後に自分の父が亡くなるとはまさか思わず、十二月八日あたふたと葬儀を迎えることになり、人に説いたことが自分自身についてはまったく無効だったことをつくづく思い知らされた。

“一カ寺の住職”という立場上、単に個人の父親の死では済まされないものもあり、地域の

の住職連、檀家総代ら、葬儀社に、と氣を使い過ぎ、父が生きて見ていたらさぞ怒つただろうほど、莫大な費用がかかつてしまった。

ただかううじて改革できたことは、何よりも「法名」の上に、金額で位が決まる「院号」をつけなかったことだ。そして、死者を崇るものとして祓う「清め塩」をつけず、会葬御礼のハガキは、葬儀社の見本ではなく、簡単ではあるが自分で書いた。

「亡き住職藤谷大円の葬儀には／お忙しい中ご会葬いただき／厚く御礼申し上げます／生前中は／親しくお付き合ひ下さいまして／真に有難うございました／住職釈大円の願いを引き継ぎ／覺了寺を開かれた聞法の場として／共に築きあげていきたいと思っておりますので／今後ともよろしくお願い致します」

そして、末娘である私が喪主になったことだった。出棺の前に、喪主の挨拶として、二十分ほど自分の思いを述べたことも、演出だらけの従来の葬儀にはあまりないことだっただろう。家を出てサラリーマンになった長兄も、頭では了解していても、私に対してどことなくぎくしゃくしていたことは否定できない……。

四十九日には、同じ住職たちに、葬儀の重々しい七條袈裟とはうつつかわつて、今度は、普段着の衣で来てくれるよう案内を出した。お勤めは僧俗ともに平座で勤め、法話を聞くことを中心にし、家意識を示す焼香も「来られた順にお済ませください」と貼り紙をしておいた。食事は、お決まりのお膳をとらず、おにぎりや焼き鳥の庶民的なバイキングにした。結局住職たちは十二人中出席はわずか二人（一人は坊守さんが代わりに来てくれた）だったが、私の友人たちは珍しい地酒を愉しみながら、交流を深め喜んでくれたように思う――。

男社会の宗教界において、男坊主たちは、院号を書く字の腕を磨き、お勤めが上手になるために声を磨き、衣の色、寺の格、本堂内陣での席順を競い合う。世襲制の恩恵に預かり、寺の「長男」に生まれれば、どんなボンクラ放蕩息子でも「若さん」と呼ばれ、次期住職の地位は保証される。

因襲的村社会と寺・教団を抱えた女にとつて、道は長く険しい。だけど、私はその一本の道になろうと思う。解放の光をはるか彼方に確かにみながら――。

有力檀家と男住職が結束

この文章を、私がうかつにも、お参り先のほとんどに配つたことから、騒ぎは大きくなつた。「有力檀家」のみならず、地域の住職たちもブツツンきたようである。

九二年五月、地元の門徒四十人くらいと、男住職数人が公民館に集まり、密かに会議が開かれ、このコピーが全員に配布されたという。文章の内容が気に入らないという点で、全く一致した「有力檀家」たちと男住職たちが結束し合う、大きな引き金となつた。

同じ地域の、ある禅宗の寺の住職は、この文章を載せた新聞を渡した数日後に出会つたとき、視線も合わさずに私にこう言つた。「仏教いうたら、右向いとけ言うたらずつと右向いてるというような教えを言うんや!」

「無宿善の機においては無左右許すべからず」とは「歎異抄」にある言葉だが、真実に目覚める縁のなき者には、みだりにみせてはならない、ということ、私にとつてもそれは教訓と

なつた。

九二年四月、一人暮らしの女性の門徒さんが、母親の法事を終えた数日後、一通の手紙を私にくれた。郵便で送られた長い手紙を門徒さんから受け取るのは、長い法務生活の中でもめつたに無いことである。地元でない門徒さんの心理を、象徴的に表しているといえる。

女性門徒の憂い

先日は大変ありがとうございました。早いもので、母が亡くなつて十二年も経つたとはとても思われません。我慢強い母でした。東京で戦災にあい全くの無一文から戦中戦後を共に生き抜いて参りました私の戦友でもあります。

その後よい打開の道が開けましたでしょうか。私どもには覚了寺さんのお寺の始まり・成り立ちが不明なので、申し上げようありませんが。また私どもは檀家の一員にはなつていないでしょう。ただし一部の方々の私有物ではないと思つています。なぜならば、僅かであっても夏・冬と年二回、お寺の維持費として出費しております。問題があるならば、何らかの問いかけがあつても然るべきかと思ひます。まるで何処かの政治家の有無を言わさぬやり方ですね。お寺も何時までも旧いものではなく、今はお寺で新しい音楽の演奏があつたりする世の中です。どんどん変化して当然なのに、若い方が次々と跡継ぎになると、また古い時代に逆戻りして行くのだろうか……。

今は根本から離れたことで非を問うてゐるのではないのでしょうか。本山の方も改革され、女性住職第一号が生まれたとの報も聞いております。どうぞお寺としてのお勤めをしつかり

として、つけ込まれぬよう、また、御兄姉、先生、友人等、仲介の方々を交え、じつくりお話し合いができればと念じております。

女性であるがためのハンディー、貴女に限らず私も随分味わつて参りました。父に早く死なれ母子家庭で育ち、悲しい、つらい、悔しい思いは限りなく、どんなに能力があつてもたかが女、ミスがなく確実な仕事をしてもらえなくて反感を買い、足を引っ張り、いろいろ根も葉もないことを言われます。皆権力をかさにきた自信のない情けない男たちです。何の力にもなりません、お身体だけは大切にしてください。一日も早くよいお話が聞けるようにお祈りしております。

お盆の仏具磨きまで中止

まず、三月頃には、総代はじめ数人（この頃から村一番の土地持ちで、隣の家のAが台頭してきた）が、ハンコを押すのと引き換えに私を屈服させてくれと、地域の住職数人に依頼した。

一、月参りの回数を減らされるし、アルバイト（他の法務スタッフ）ばかり来る。

二、法要で呼ぶ説教師が「差別」やら「政治」のことばかり言つて仏法の話をしていない。

三、「檀家」以外の者に本堂を貸して火事でも出たらどうするのか。寺は我ら先祖代々が寄進してきたものである。

四、漢文のお経を近頃は読み下しにしたりしてちつともありがたくない。

簡単に言えば、檀家から出たこれらの苦情を聞くようにということだった。

七月には住職数人が、代わりに交渉にやつてきた。席上、この地域ではボス格の住職Dが、「どうや、あちこち頼まれる講演をとり止めて、読み下しのお経を元の読経に戻して、これで十年腹くくって頑張つてみいひんか」と取り引きしようとした。

私は、月参りをうつかり忘れたとか、法事に遅れる等のいたらぬ点は改めるけど、そんなことと引き換えに住職承認のハンコは要らない、と答えたことで、Dが「十二組（この地域）に藤谷不三枝はいらん！」と大声でどなりつけ、話し合いは決裂し、八月二日には、婦人会によるお盆の仏具磨きまで中止にされるといふ嫌がらせにまで発展した。

前日の八月一日、婦人会の会長であるAの妻から電話がかかった。

「総代さんが中止するようということですので」

「仏具磨きは婦人会の行事です。何で総代さんから命令されなあかんですか」と反論する私に、「婦人会は総代さんらの下にあるんです」とAの妻が答えるのには、開いた口がふさがらなかった。

この頃から、今の体制では私を屈服させる力がないものと判断した「檀家」のAが、総代、世話方もいったん解散にして、それらも含めて、自分を中心となつた強力な新体制（「覚了寺問題に関する対策運営委員会」と称する二十八名で構成された会。全員が借家持ちか親戚の多い家柄の「本家」で、私を完全に屈服させるか、追放する方針で、乗り出したのだ。

門徒総会で弾該決議

ある門徒からの知らせで、「十月四日門徒総会」という通知が回っていることがわかった。しかも、寺の本堂ではなく公民館でだ。それには、決議事項として次の二点が掲げられていた。

一、宗教法人覚了寺の代務住職承認の賛否

二、宗教法人覚了寺の藤谷不三枝氏の法務の行為を拒否する賛否

二、などは、初めに答えありき、がみえみえだが、ともかくも、「私には通知がないんですけど」とA宅に電話すると、Aの妻（覚了寺婦人会の会長）が「これは門徒の総会やから、お寺関係ないんですわ」と答えたのには呆れてしまった。

その翌日、「檀家」には婦人会役員らによつてその報告が届けられ、私には隣のA宅から郵便内容証明で、速達で送りつけてきた。

通知書

新涼の候、貴殿におかれましてはますますご清栄のことと存じます。

さて、宗教法人覚了寺の門徒総会が平成四年十月四日に開催され、その総会において圧倒的多数でもって、次のように決議されました。

よつて、門徒一同は、その決議の内容を貴殿に対して通知しますと共に、この決議に添った対処を貴殿に求める次第です。

門徒総会の決議内容

一、宗教法人覚了寺門徒一同は、藤谷不三枝殿の宗教法人覚了寺の代務住職継承の承認を

拒絶する。

二、宗教法人覚了寺門徒一同は、同寺の法務について、藤谷不三枝殿のその行為一切を今後拒絶する。

右は、宗教法人覚了寺の門徒一同の決議であり、門徒の総意でありますので、貴殿は厳肅にこれに従って下さい。

以上の通り貴殿に通知致します。

この度の宗教法人覚了寺の門徒総会の意志を尊重される行動を貴殿が取られるよう重ねて申し入れます。なお、宗教法人覚了寺の門徒からの衣料（お寺の管理維持費用）の受領は今後行わないで下さい。右通知まで。

平成四年十月五日 宗教法人覚了寺 門徒一同

代表者○○○○

藤谷不三枝殿

門徒たちの村八分

藤谷不三枝は確かに私の名前である。「家名」を表す「藤谷」はともかく、個人を示す「不三枝」は決して嫌いなわけではない。が、ここでのAの意図は、あの親鸞が念仏弾圧を受け、「藤井善信」という名で還俗（僧籍剝奪）させられたのと同じであると思うのは私の深読みだろうか……。

「總會」の直後、私を支えてくれる門徒さんらから、その報告を受けた。テープをひそかにとつてくれた人もいた。「何や二階へはしこを掛けといて外されたようなことになりはせんか」という声もあつたが、「踏み絵」のような情況の下、あれよあれよという間に採決されたという。混乱した情況の中の十月七日、八日、覺了寺報恩講は開催された。門徒は数人だつたが、友人たちがこそつてつめかけてくれ、人出だけは賑わつた。

その二日後は村の秋祭りであつた。村の団結意識や、村と村の対抗意識を高めるみこしかつぎは、ひと昔前までは、「よそ者」（村に先祖代々から住んでいない者）にはかつがせなかつた、というほど、日本という村社会は排他的である。「祭りで死ねば本望」というように、結局は男の力を誇り示すものだ。従来から祝儀なるものを渡したことはなかつたのだが、いつの時か私の留守中に家人が渡してしまつたことがあつた。その後日、檀家の一人に「この間は皆喜んでつたで。今までは怒つとつてんで」と言われ、びつくりしてしまつた。それ以来、秋祭りには祝儀をくれと、だれかが請求にやつてきていた。

さて九二年の秋祭りも「檀家」の一人が、「御祝儀」をくれと玄関にやつてきた。その神経に呆れた私は、当然のごとく断つたが、「うちは「總會」に二人出てくれと言われた」と、相手がボロッとこぼした言葉にもつと啞然とさせられた。Aたちの言いなりになる「檀家」からは二人も出させ、言いなりになりそうもない「檀家」には極力白紙の委任状を出させているのだつた。

「しきたり」と「村八分」という言葉が日常茶飯事に飛び交うこの村社会で、白紙の委任状を出して欠席した大半の門徒たちは、有力者たちから「總會決議」を突き付けられておびえ、

門戸を固く閉ざした。店を經營しているある門徒の女性に、店先で話しかけたことがあった。「うちは役員さんらにお任せしてますねん」と氣恥ずかしげに笑って答える彼女に、夫が店から顔をのぞかせ、「おい！」と、こんなところでしゃべつてるところをだれかに見られたらどうすんねん、と言わんばかりに呼びかけたこともあった。

広がる、黒い手

一方的「門徒總會」の数日後、早速ある仲のいい門徒の女性からおびえながら電話がかかってきた。十月十一日に予定していた法事を「本家」が断れと命令してきたと言うのだ。「他の住職を頼んである」と。「本家」というのが、「覺了寺問題に関する対策運営委員会」のメンバー、なのである。（中には名前だけ貸せと入れこまれてしまった者もいる。以後メンバーと呼ぶ）。対策委員は全員が借家持ちか「本家」だから、それぞれが自分の関係、つまり借家人の「檀家」や「分家」を「教化」して回るといふわけだ。

「本当に蓮月さんには何と言つてよいのやら、合わす顔がありません。夫のお母さんが、「本家」から言うてきたら何も言われへん、と言うのです。そのためにお母さんとケンカにまでなつて……ホンマにこんな状況のさ中に、一体どこの坊さんが来るのか……」と、「一家揃つてうちは蓮月さんのファンです」と言つて下さっている女性が、泣きながら電話で話された。結局、九二年に入つて、「檀家」から仲介を頼まれたからと、再三私の所へやつて来て、だんだん圧力をかけてきたB住職というのが、Aと完全に手を結んでいたことがわかつた。十月十

日、AとB住職が某寿司屋で密談をしていたという情報も入ってきた。

十月十三日、「十一月からの月参り、他の住職が来ることになったから、祖先の命日、何日か書いて出せ」と、役員が手分けして回っていることを知る。ある門徒の女性は、回ってきた「役員」に「こんなこととして法律に触れまへんか」と思わず聞いたという。十月十六日、ついに腹立たしさがこみあげてきて、本人がB住職に電話でどなり、「手を引く」という返事を得る。時限爆弾の発火寸前をくい止めたような気分で、一息つけるかと思つたが、それにしても収入と勢力範囲さえ増やせばそれでいいのかと、「火事場泥棒」的体質のB住職が情けなく思えて仕方がなかった。

後日、報恩講で「法話」をしてもらつた住職から手紙をもらつた。私が評価する数少ない男の一人である。

「報恩講ご苦労様でした。その後、不二枝姉さんとあい、心配していましたがいろいろわかりました。Bさんがどういう人物かはだいたい想像していましたが、それ以上にひどく情けなく、悲しみと憎しみを感じます。女性差別の根もあり、まさに男社会の縮図です。いろいろ心配ですが、応援しています。今後ともよろしく」

冷ややかな隣人

月参りは六割以上ストップしたが、それでも毎日少なくとも一件はあつた。十月十八日の朝、急いで出ようとすると、隣のAの妻が家の前に立っていて、冷ややかに、こうのたもう

た。「お参り行つたはりますのん」

私は緊張と警戒した面持ちで「ええ」と答えるしかなかった。

「イヤ、約束守つたはれへんなと思つて」——つまり内容証明郵便で、お前を拒絶することを「圧倒的多数で決議」したから嚴重に従え、とあれほど言つておいたのに、その約束を守っていない、というわけだ。

「……」一瞬私には発する言葉もなく、自転車で立ち去るしかなかった。後で姉の不二枝さんや法務スタッフの美彌子さんに、「約束なんてしていない、と言ひ返せば良かったのに」と言われたが、ほんの少し前まで気のいい人やと思つていたのが裏切られた、そのショックと戸惑いでうろたえた私に、即言ひ返す言葉はなかった。覺了寺の婦人会の会長を努める彼女は、今年の四月には婦人会のバス旅行で隣に座つて行つたというのに。(数億円の豪邸を建てた途端に、夫は自治会長、妻は、とこうなりにけり。…そんな土地柄なのだ)。

教団発行の八七年十月月号刊「同期」には「Aさん」として次のような出会いを記したのだつたが……。

「二十代三十代、今振り返つてみて、私いつたいなにしてたんやろと思いますねん。全く記憶がないんです」と訴える眼差しその人は、お参り先のAさんである。生協の共同購入を共に始め、これで少し時間ができたと喜ぶ私に、彼女「やつぱり毎日市場には行くので、冷蔵庫の中は満杯」と。「ええどうしてですかあ」と問う私に、そばのBさん、「お姑さんいたはるとこは、せめて買い物ぐらひに出んと、息抜かれしませんがな」と笑う。

聞けばAさん、子どもも手が離れた今は、幼い時のように「お母さん、お母さん」と甘えてくれるわけでもない。「やつぱり寂しいです……。そら、子どもが手を離れたらこれするねん、とか思たはる人はいいです。私はそんなん何もないから……」

同じ専業主婦でも、Cさんは違う。「毎日出歩いて、きょうはどこいこうかなて思ったり、楽しいて楽しいて」と話す彼女に、Aさんの「いいわあ！ 私なんかどこも行くところない……」と笑って返す言葉は、なおさらむなしく響く。いつも家族のために自分を捧げ尽くすことを余儀なくさせられてきた女の、正に今の実感であり、悲痛な叫びなのだろう。

私はふと、お参り先でのDさんの言葉を思い出していた。「蓮月さんて、ほんま闘ってるっていう感じ、活々としてはって羨ましいですわ……」「私ら、ずつと家に押し込まれてきた者は、社会には大事な問題がある、とわかっていても、思うように立ち上がれないんです……」と伏し目がちにつぶやく彼女。

「……でも、このことにまず気づいたことが大事なんで、それがなければ何も始まりませんものね」と頷くAさんと真向かいながら、口を閉ざしていた女たちが、今ようやく開き始めたのだ、としみじみ思う。

まるで人形のように罪のない顔をしている彼女の、今のその形相はまるで別人だった。私は今さらながら、人間の恐ろしさをまざまざと見せつけられた思いだった。

内容証明で反論

その二時間後、十一時からの本堂での法事を、大谷派の友人で法務を時々手伝ってもらっている工藤美彌子さんに頼み、もう一軒の法事先に出た直後のことだった。隣のA夫妻がやつて来て、美彌子さんに「今日の本堂での法事、聞いてない！ 約束を守っていない！ あのらに今すぐ出て行ってもらえ！」と怒鳴つたのだ。門の外での押し問答だったが、気配を察した法事の人々（檀家）ではなく、たまたま頼まれた）は、法話の時の美彌子さんの説明にさすがに驚いた様子だったという。連日の緊張とその出来事が追い打ちをかけ、翌朝には三十八度四分の熱を出した彼女だが、無理を押して予定どおり長野の研修会に旅立った。

一方的に送りつけられた内容証明郵便ではあつたが、返事をださないと、総会の通知を了承したということにされてしまう。美彌子さんにまで余計な負担をかけてはと思い、そんなに返事が欲しいなら送つてやるぜ！ と私も内容証明、速達郵便で隣に送り付けた。

去る十月五日、確かに通知書をお受けしました。御返事が遅れましたことはお詫び申し上げます。

前日に「門徒総会」を開かれたのですが、法務に携わる僧侶抜きの「門徒総会」などというのは、認めることができないものであります。またその決議内容においても途中で怒つて帰られた方もあり、「門徒一同」「門徒の総意」と言えるものでは決してありません。普通なら物事を収める方向に進めるものであるはずが、悪化する方向へ向けられているこ

とも事実だと思っています。

よって私としましては、一方的な通知は「約束」とはならないことをもつて、御返事とさせていただきます。

尚、従来から、覚了寺創建以来、未だかつて法事の本堂使用に、たとえ総代であつても了解を得なければならなかつたことは、一度もないことを申し添えておきます。

一九九二年十月十九日

真宗大谷派覚了寺僧侶 藤谷不三枝

新聞を書いて配る

檀家の月「忌」参りは、「門徒総会」後、約三割くらいまで減つてきた。まるで原発推進派の地元住民の切り崩しのように、地縁血縁のしがらみで圧力がかかり、「檀家」の人たちが次々とお参りを断わつてきた。私は、道で会う門徒さんにはことごとく話しかけたが、「総会」以後、家で鳴りをひそめているのか、不思議と顔を合わさなくなつた人も多く、私の気持ちを伝えるには、新聞を書いて配るしかなかつた。

先日十月四日「門徒総会」と称して規則上の正規の役員抜き、そして何よりも本人の私抜きで開かれたことに対しては、全く私は了承できません。あの会議に参加された人の中にも、こういうことに採決をとること自体がおかしい、と怒つて帰られた方もおられます。

私自身にも、確かに至らない点がありました。ただ法事をボイコットしたとか、法事に一、

二時間も遅れる等のことは事実なかったことです。法務のあり方等については、じっくりお参りの時にお話ししあつていきたいと思ひます。

報恩講も延期、との通達が出ています。親鸞さんの報恩講を延期や中止することは、あつてはならないことです。例年通り十一月六日もお勤めいたしますので、必ずお参りいただきたくお願い致します。

皆さんもあの「決議」に従うのではなく、自分の誠意に従つて行動してください。私は今もなお毎日お参りには出ています。多くの檀家の方々、全国の住職や仲間が支援して下さいますので、皆様もどうか今後もご協力よろしくお願いいたします。

僧侶とは「道を求める者の集まり」

そして、私に対する苦情に、答弁としての私の理念を四点に分けて文章で表明した。

「法務の件について」は、月参りの回数を減らされるし、他の法務スタッフ（「アルバイト」と連中は呼ぶ）ばかり来て自分は来ない、外出が多く寺を留守にされて困る、という苦情に対して、僧侶というものが、葬儀や法事、月参りのお経をあげるだけが仕事ではなく、寺檀関係を越えて社会に係わる仕事を持つことを述べ、社会的実践者としての僧侶への理解を求めた。

僧侶の仕事というのは数知れない多くのことがあります。いわゆる月参り、法事、葬儀、それから過去帳が古くなつたら書き換えて欲しいとか、墓、仏壇を新しくしたからお勤めし

て欲しい等の、臨時の不定期に頼まれる仕事もあります。また、教団で起こった出来事、事件に対しての取り組み、他のお寺や他所での講演、またどこかで紹介されたりして訪ねて来られる方々の悩みの相談の仕事も結構あります。その他、寺、庫裏（僧侶の住まいだが事（寺）務所の意味で、仕事をする場所）の手入れも多く、仕事には限りがありません。何よりも私は書くことを中心にしていますので、「年中無休」という僧侶の職業上、自分で臨機応変にしていなくて休憩もままなりません。もつとも私事にみえることもすべて僧侶の勉強と私はとらえています。そもそも僧侶の本来の意味は「道を求める者の集まり」ですから、勉強することが仕事といえるわけです。道を求める僧侶たちが、覚了寺に実践を積み集まったり、立ち寄ったりすることは、覚了寺の門徒として（私も一門徒として）光栄なことであるはずで。なにぶん私蓮月一人では覚了寺は回っていきませんので、その点でご理解のほど、どうかよろしくお願い致します。

現実政治を批判してこそ僧侶

「蓮月尼が勝手に人選し、「テーマ」まで指示している、呼ぶ説教師が差別やら政治のことばかり言つて、仏法の話をしていない、遠い所から交通費を出してまで呼ぶなんて。近くの住職を呼んだらいいのに」という苦情に対する私の見解は、「法要のお説教師さんについて」にまとめた。

真宗は、鎌倉時代に、権力から、あるいは権力と結びついた旧仏教の勢力から弾圧を受けた歴史を持つ親鸞を宗祖に掲げるわけですから、当然その教えを正確に伝える者が説教師でなければなりません。交通費等の経済的事情も無視できませんが、前述のことを一応基本として説教していただく方を厳選しております。僧が一人で決めるのは民主的でないように思われがちですが、前述したように、法務はあくまで真宗の教義、歴史に基づくお話であるべきものです。誰がどんな内容の話をされ、適切か不適切かは、十三年間僧侶として学んできた自分が一応把握できていると、自負しております。「どんなお話にしましょうか」とお布施と引き換えに、僧侶がニーズに応じて何でも注文を聞くようなことではいけないと思っています。

また「法話」のよくできる僧侶というのは、全国的規模で探さなければまだまだ限られています。お釈迦さんがお話をして回られた仏教の原点を考えますと、僧侶というのは、本当は「読経」よりもお話をするのが中心ですので、これはとても恥ずべきことであるわけですが……。

と、差別を問い、現実の政治を批判することが、仏法とも真宗の教えとも少しも違ってないことを述べた。

寺は人びとに開かれた場のはず

「檀家以外の者に本堂を貸して、火事でも出したらどうするのか、寺は我等先祖代々が寄進してきたものである」との苦情には、「寺院の運営に関して」で、私なりに答えた。

寺というのは、基本的に、縁ある誰にでも開かれた集いの場です。確かに建立された元を言えば、その地域の方たちが寄つて、その基礎となる道場を開かれたわけですが、それもまた自分等だけのものと門戸を閉ざされるのではなく、後世に至るまで広く人々に、この道場に集い、共に語り合い、聞いていくことで、それぞれの「人生という道場」を開いていくって欲しいと、切実に願われたのだろう、と思いを馳せることは、決して間違っているとは思えません。（中略）宗教関係以外（の使用）でも、お寺というのは、本来悩める人びとがそれを持ち寄つて集う、開かれた場であるはずですし、またご心配の火の用心も、二、三時間の寄り合いなら、私が見ていますので、役員さんへのご連絡は省かせていただきます。多人数の合宿の場合はご連絡しますが、僧侶はアパートの管理人ではありませんので、自主性を尊重いただき、くれぐれも、「検閲」「チェック」にならないよう、お願いいたします。

そして、以上三つの総括的な見解として「門徒に対する教化方針」を述べた。

ご存知のように、真宗のお寺は、世襲で成り立っています。私も前住職の実の娘であるわけですが、私がこの覺了寺を足場として教化活動をさせていただくのは、血を分けた娘だからではなく、他の点において、私の価値、意味があると思っています。真宗の寺という以

上、宗祖親鸞の生きざまや願いに立つたものであることが基本です。月参り、説教師の件、お寺の運営、教化方針に関しまして、門徒さんの中で、ご要望やご批判がありましたも、それが親鸞聖人の願いや生きざまに相応しいものであるなら、その点をこちらから充分にご理解いただけるよう、お話しして参ります。

「土着の人々の労力・努力で建てた寺」であつても

一方的「門徒総会」以降、しばらくは毎日のように法務を断る「檀家」が相次いだ。「永いことお世話になりましたけど、もうお参りは結構です。よろしく」と留守番電話に入れられてあつたりした。また朝、門を開けに行くと、郵便受けに手紙が入れられていることもあつた。

「いつもお世話になり、ありがとうございます。この度総会で決まりましたので、明日の月参りは経過がはつきりするまで中止させていただきますので、よろしくお願いいたします」時には「当分家でお勤めしますので」との手紙と一緒に、気まずさをカバーするかのよう、天津甘栗が添えられていることもあつた。

ある「旧家」を誇る人からは「(欠席で)委任いたしました以上、決められたことには従わなくてはなりません」とあり、追伸には「土着の人々の労力・資力で我々の寺を建てた」ことが強調されており、「土着の檀家の一員としてこの結論になりました」と結んであつた(傍点
は筆者)。彼女は前の婦人会長であり、八七年六月付け教団発行の「家庭通信」に私は次のような文章を書いていたのだつた。

私が預かる寺の婦人会の、今年選ばれた会長さんの所へお参りした時のこと。

「引き継ぎのときは、新会長が前会長と役員に会席膳を振る舞うことになっていると前会長さんに言われましてね。ずっと伝統的にやってきたことやから、ちがったことはしてくれな、と。それから会の旗というのを見せられ、葬儀のときにこれを持つて立つてくれ、と言わはるんですけど、何やら古い旗ですの。これはひよつとして国防婦人会の旗をそのままもつてきたはるんではないかと思いますが」

「いやあ、そんな旗、みたことありませんし、ましてや葬儀に持つて立つなど、私が法務をしだしたこの七年間はありませんでした」

私は驚きながらそう答えるしかなかった。

岐阜の山奥から「養子」でこの寺に來た父は「多分婦人会の旗やろう。ワシが來た時は、確かに葬儀の時には旗が揚げられていた」という。

寺の婦人会と名だけはいっていても、政治選挙の時期になればその後援母体として働くし、年一回の旅行には、政治家から金一封が贈られ、演説らしきもので送り出されて神社参りの一つもする。恒例の新年会にも、政治家がその肩書で住職と並んで「上座」に陣取り、挨拶もするという、まさに政治の場であり、「融通無碍」なる会だ。それが門徒さんの葬儀に旗を揚げて立つとしたら、不気味としか言いようがない。それは戦時下に、「銃後の女たち」として、何かことあればさつそうと割烹着姿で繰り出し、そこに生きがいを見いだした国防婦人会と、さして変わらぬと言えないだろうか。

「とにかくあなたは名前さえ貸してくればいい、何も言わんと座つてたらええ、と。ち

よつと発言でもしようものならそんな風に叩かれて、何とやりにくい村やろうとつくづくいやになり、今後一切何も言わんとこと思いました」と言われる。

「そう言わずに、昔から伝統的にやつてきたことが変わつていくのは気の遠くなるような話ですけど、何とか一緒にやつていきましよう」と挨拶して帰った。

またある日のこと、今度は「主人」という言葉のおかしさに話が及び、「あの人（夫）は、とにかく会社でも選挙でも、ドカツと座つてチヤホヤされるのが好きな人で、家の物を持ち出しては、旅行して芸者呼んでパツ！」と使い果たしてしまふんです。そんなあの人見てたら、つくづくいやになり、もうとても「主人」と呼べなくなつて、よしそれなら見返してやろうと思ひましたの。女も経済的自立つて大事や思ふんです。うちは財布が別々ですから、人格も別々にあります」ときつぱり言い切られる。

そうだ。日本は「一家に人格が幾つもあつては困る社会」で来たのだ。いやそれどころか、一町一村に人格が幾つもあつたらドエライことだつたのだらう。そしてそれは、因習の根強い村では、現代でもさして変わりはないことは、実感を含めて言える。

私は会長さんの所へお参りに行くのが楽しみになつた。自分が課題をもつということは、人との出会いを生み出してくるものなのだなあと、今さらながら思はされる。

この前会長といい、現会長といい、一度はふれあいがあつたと思つたのは幻想だつたのだらうか……。

一方で「有力檀家」の圧力におじけず、自分の意志を貫いてくださる人も確かにいた。

「総会でこのように決まつたから守るように。今度は他の住職が来ることに決定した」と言つてきたメンバーに、「いや、うちは蓮月さんに参つてもらいます」と答えたというある門徒さんは、「それじゃ、蓮月さんがどうなつた場合でもいいんですね」と、強い口調で言われたと言う。私が寺を出されるとかして参れなかつた場合に、後で「他の坊さんを世話してくれ」と泣きついてきても知りませんよ、という意味らしい。

またある女性も、訪れたメンバーが、「他の住職が蓮月さんかどちらでもいい」と言うので「じゃあ、うちは蓮月さんに参つてもらおうかな」と答えると、「どつちでもいいんやったら、こつちにしかはつた方がええよ」と言われて「こわーっ」と思ったという。

八十歳の一人暮らしのある女性はこう言つた。「総会に出てみてようわかつた。あんた抜きやし。子どものいじめのこと言われへん。こんなもん、大人のいじめや。お父さんが亡くなつて女一人でやつてゐるで！」

また別の、やはり一人暮らしの八十歳の女性は言つた。「強い者勝ちの世の中ですなあ！　こんなことでは日本ももうあきませんわ！」

現代の踏み絵

村の「有力檀家」と地域の住職連の私へのいじめはますますエスカレートし、「屈服か追放」を迫つてきた。十二組（この地域二十一カ寺を言う）全体の合意の下に、各寺が覚了寺の「檀家」を仮預かりして、法務を分割するというのだ。十二月に入つた頃、親しい門徒さんから



「覚了寺門徒管理表」なるものを見せられた。「マル秘資料」とあり、メンバーらは今度はこれを持って回っているという。

「勤め先から帰って来たら、留守中にこんなものが入っていた。全くわけがわからん！」ある夜、その表を持って私の所へ飛んで来られた人がいた。組合活動をしている男性である。「あなたのはここは〇〇寺が参ります」と指定までしてある。

覚了寺門徒管理表

平成 年 月 日 記
〒
住所
電話
過去帳記録
法名 年月日 俗名 備考
(1)
………
(10)
月参り① 日 ② 日

⑭ 法務・教化を行う為の資料

家族
氏名 生年月日 男女 勤務先 備考
①
………
②

略図

「何でこんな勝手に全然知らん寺に決められないといけないのか。だいたい同業者でしょう。この〇〇寺の住職などは断るのが筋やないですか。勤務先まで書かすなんて。こんなこと、そうですかと言つて書く人の気が知れん！」と、信じられないという顔で問う彼に、私は頼もしさを感じてむしろ救われる思いだった。家族構成や勤務先、過去帳の内容を書かせるような、身元調査ともいえる人権侵害のこの表に記入して、提出させ、おまけに「あんたのここは〇〇

寺の住職が参ることになった」と、住職を強制的に指定し、あろうことか、これからお世話になるのだからと、住職への御礼の品を買っておいて、これを渡すようにと車に乗せて住職の所まで連れて行くという、どこかのえせ宗教団体のことを言えないようなことまでしているのだ。「御礼の品」というのは、覚了寺の維持費であり「檀家」から集めている金から出ているのだから聞いて呆れる。結局は住職等に横流ししているわけで、政治家の賄賂と何ら変わりがない。戸惑う「檀家」の人たちにお構いなく、メンバーたちはクリシタン弾圧の「踏み絵」のごとく、その「門徒管理表」を提出することを次々と迫った。悩む神経を持ち合わせている人たちにとつてはとんだ年の暮れであり、私はまさに大晦日のギリギリまで「永いことお世話になりましたけど…」の来客と電話の応対に追われた。

「檀家」対「蓮月」の対立ではない

ここで断つておくが、「檀家」を金づつと捉えて、取った取られたと言っているのではもちろんない、ということだ。自分の権力を行使し、圧力をかけて私の法務を断らせ、他の住職を割り当てることが異常事態だということだ。

週刊誌「アエラ」九二年十一月十日号や「フライデー」十二月十日号に取り上げられたりしたが、真相は十分に伝えられてはいなかった。ある門徒さんの「何かあたかも蓮月さんと「檀家」が対立しているかのように思われているけど、本当はそうじゃなく、蓮月さんに反対する人对蓮月さんを支持する私らとの対決なんや」という言葉が、むしろ真相を言い得ている。ほ

とんど「地主」対「借家人」、「旧門徒」対「新門徒」の構図になってしまった。

だが、その一方で、「あの人ら（メンバー）」と蓮月さんとのもめ事に私ら振り回されて、はつきり言つて迷惑ですわ」と非難めいて言う人もいた。はつきり言つて私は「いじめ」を受けているのだ。いじめる者といじめられる者との間に置かれて悶わらされて迷惑やて？ 冗談やないで、と言いたい（言うても通じないから我慢してるけど）。いつ亡くなるかもしれぬ重病人を抱えている身だからといって、「腐つても鯛」的に死者供養の執行者としての男坊主を求めずに、いつそのこと坊主無しで葬儀を行なう発想をエエ加減に持つてみたらどうなのか。

信心のまことならぬことのあらわれてさうろう

年の暮れ、親しい門徒さんから、こんなものが入っていたと知らせを受けた。覚了寺婦人会の今年の収支決算書だった。

「年末もおしせまり、大変お忙しい事と存じます。平素は、覚了寺婦人会の活動にご協力頂き、厚くお礼申し上げます。さて現覚了寺婦人会役員の任期も本年度をもつて終了致しますが、次期役員については、現在覚了寺問題が解決するまで、役員不在の状態に致したいと思ひます。従つて、婦人会の運営活動・会費の徴収は、延期とさせて頂きます。尚、新年会は、中止させて頂きます。何卒ご了承の程よろしくお願い申し上げます。役員一同」とあり、会計報告の最後に、「残高は、現会長が保管します」と書かれていた。それにしても、今回の事件を通じて一人一人の心のうちが手に取るようにわかった。「この

人（私）に今ついたら不利やな」とばかり、コロツと手のひらを返したようになった人、悩み、私に申しわけないと思いがちながらも、因習的村社会のしがらみの中でがんじがらめになつてしまつてゐる人、地元の人間でありながら「なんちゆうとこや、ここは！」と怒つてくれる人、よそから来て何十年経つ今も「よそ者」扱いされるため、問題がわかると言つてくれる人、等々…。

親鸞さんも、「ひとびとの日頃の信のたじろきおうておわしましそうろうも、詮ずるところは、ひとびとの信心のまことならぬことのあらわれてそうろう。よきことにてそうろう」（『御消息集』広本）と言つてゐるではないか。

「まず権力を握れ」とすすめる人びと

九三年に入つて事態は少し収まつたかに見えた。

一月のある日、八十歳の独り暮らしの女性Cさんの所にお参りしている最中、二人の目の前で電話が鳴つた。某メンバーからだつた。

「お宅は今日が命日ですな。〇〇寺の住職がそちらのすぐ近くを参りますからどうですか」という催促の電話であつた。

「あのねえ、私ははつきりお断りしたはずですよ」ときつく言われたCさんだったが、メンバーたちの強引ぶりに二人とも改めて呆れ、怒るばかりだつた。Cさんの、「今お参り先は何割か知りませんが、食べていくのは何としてでも食べていける。私らでやつていきませんか」

との頼もしい言葉に、私は「はい」と元氣良く答えた（お参り先は二割強に減っていたが）。今回の覺了寺問題を振り返って考えてみた時、フェミニスト（自称）の男の友人が、「『三従』という、従うべきとされてきた父、夫、息子の、どれも持たない女を絶対認められぬのや。教団も村社会も」と力説していたのを思い出す。

また、心配してくれる仲間でも、男と女では若干考え方の違いがあるのに気がついた。ある男の友人が「○○君とも話してたんだけど、とりあえずお兄さんに住職になつてもらつたら」と言うのには啞然としてしまい、男の判断や感性つてこんなものかと、むなしくさえ感じた。また、何人かの男友達が、「どうや、一つここは一芝居打つて、嘘でも謝つて檀家總代に住職承認のハンコをついてもらつたら？ 代表役員である住職にさえなつてしまえば、後は何とでもできる。権力が一番強いからだから」と私に提案した。（これつて社会党の辿つた道やねー。まず、権力を握つてから、こちらの方向に持つてくると思つてるうちに、ミイラとりがミイラになる……）

「連なれる女」と「繋がれる女」

その提案にひどく抵抗のあつた私は、早速お参り先や、周りの女性に愚痴るつもりで「どう思う？」と問いかけた。「そんなこと私ならできんな、蓮月さんかてできんやろ」——数人がこのように反応した。守るべき肩書きを持たない女が、ここはやはり強いのである。ところが、その女の中でもこんな時にいざ力になってくれるのは教団外の女たちだとわかった。實際、

教団に対して嘆願書を出して実践してくれたのは〈関西おんな労働組合〉だけだった。

真宗大谷派 大阪教務所様

突然ですが、朝日新聞社「アエラ」に掲載されております「女性住職の誕生めぐり末寺が大揺れ」を読み、お便りを思い立ちました。

ごく普通の現代つ子娘であつた藤谷さんは、父親の病気を機に寺へ戻り、親鸞の教えにひかれて現在の活動に入つた、とあります。

私は特に宗教を持つてゐるわけではありませんが、十数年前に倉田百三の「出家とその弟子」を読み、親鸞のその穏やかで深い人間愛にとても感動したものです。また他の本では、そうなるまでの親鸞の軌跡は、権威と長い慣習に墮落した宗教界を一新し、真に民衆のための宗教を打ち立てることを目指しての革新的情熱に燃えたものであつたことを知り、そのエネルギーに感心したこともあります。女性の立場から見ても、現在の宗教界が性差別を乗り越えていないことは明白なことだと思いますし、現在の社会が様々な差別、不合理を抱えていることも事実だと思います。

社会的活動に熱心な僧侶がたくさん居られる真宗大谷派（部落差別への取り組みはよく新聞で見えております）の中で、藤谷さんが親鸞にひかれ、その活動の心を受け継いで差別と不合理を無くする道を布教することは間違っていないと思います。しかし、その活動が檀家さんたちの思いからは多少ずれることがあるかもしれないのは、現実には差別を温存している社会にあつてはやむを得ないことだろうとも思います。

このくい違いから、「アエラ」にあるような確執が生まれたのでしょうか。女の一人として、藤谷さんの活動に声援を送りたいと思いますし、檀家さんたちも理解していただき、一緒に平等社会を作り出して欲しいと願っております。教団の役割がどうなっているものか、私にはよくわかりませんが、社会活動に理解ある真宗大谷派の立場から、この問題が速やかに解決しますようご助力願えないものでしょうか。

突然で誠に失礼とは思いましたが、思わず筆を取り上げてしまいました。お許しください。

関西おんな労働組合

底辺におかれて抑圧されているからこそ、力を合わせ横に連なれる女たちと、ちよūdど多くの坊守（住職の配偶者）のように、経済的には恵まれているにも関わらず、「寺と家」という「金の鎖」（大無量寿経）に繋がれて、そこから抜けられなくて引きずっている女たち、男の社会にそわせて自分の位置を確保し、そうでない女たちを踏み台にして生きている女たち……。金だけど鎖には違いない。鎖なんだけど金でできているのだ。そういう意味では、今回私に屈服を迫るために奔走して回った「檀家」の女たちも、「金の鎖」をむしろアクセサリーにして楽しんでいると言える。

檀家総代は ほぼ一〇〇%男性

さて、ここで断っておくが、住職になるには檀家総代のハンコが要る。したがって、制度的

には今のように条件つきながら女性住職が認められるようになって、これまた、ほぼ一〇〇%男である総代に憎まれればその実現は不可能なのだ。それに、住職は寺の代表役員だから権力が一番強い、というのは建前の制度であつて、実態は必ずしもそうではない。二代続いて「養子」、いわば「よそ者」であつた前任住職である私の父や祖父は、権力が強かつただろうか。NO! 「御院さんは黙つてお経さえあげてたらよろしい」といった調子だ。制度など、意識が変わらなければ、あつて無きが如しなのである。週刊「フライデー」の記事の見出しに、「『型破り』女性僧侶が住職目指して奮闘中」とあつたが、私はそもそも住職になるためにこの十三年間やつてきたわけではない。むしろ住職という者の存在が「御院さん」と呼ばれるように、各寺や地域社会における「ミニ天皇」になり果てている実態を暴き、男社会を根底から覆そうとすることで、寺を民衆の解放区に、また抑圧された女たちの駆け込める場に回復しようとしてきたのだ。さしずめ内閣たる総代ら有力者は、村の統合の象徴として寺や神社を利用してきた。もともと檀(旦那)那とは「ダーナ」施す者、パトロンの意味である。

「檀家制度」……江戸幕府がキリシタンをチェックし排除するために、どの家も「お前のところは確かにここの『檀家』やな」と、どこかの寺に属させたのが始まりだから、いわば権力にヨイシヨして「一向」宗の反骨精神は売り渡し、アメを握らせてもらつて生き延びたわけである。そんな支配の制度を今なお持ち続けているという矛盾……。

檀家制度で縛られた僧侶と「檀家」との関係を問ひ直すことで、「檀家」はいったん解散し、改めて自分の自主的判断で誰からも左右されずに僧侶を選び取り、どのような寺を願つていくのか共に考えていくことが、もういい加減必要なのではないだろうか。

闘いの武器としての、文章による告発は続ける一方で、これに振り回されず、せつかく浮いた時間を、自分を磨くことや女たちの連帯にフルに使つていこうと、気持ちを切り替えている今日この頃であつた……。

と、そんな矢先、怪しげな動きが起こつた。

昨年の一方的「檀家総会」と同様、またもや「報恩講」の直前である、一〇月四日、夜遅く帰宅すると、門の戸に貼つた寺報「活々」の上に、すっかり重ねて貼り紙がしてある。名前は無く、筆で次のように書かれていた。

説教師の言われることは良い話ですが、言うはやすいが行い難しで、誰でも自分本位のことは言いますが……。

覺了寺女僧と門徒の皆さんと、腹を割つて話し合い、お互い相手の身となつて物を考えるなら、もつと早く話がつくと思います。どちらも言いたいことを言つて相手のことを考えないようでは、何年かかつても駄目ですね。仲裁は時の氏神と申します。覺了寺の藤合家の先祖も悲しんでおられます。また門徒側の先祖も、立派な寺が有りながら、他寺の一宿一飯の世話になつてゐるなんて、実に情けないことでありませんか、よく考えて下さい。

みえない影

さつそく姉の不二枝さんに見せると、「いろいろな意見を言うのは自由やけど、名前ぐらい名

乗るべきやわな」と言った。もちろん、一〇月七日の報恩講でコピーを配り、読み上げて報告した。

ところが、七日夜の法座に参つてくださった法務スタッフの美彌子さんのお母さんが、ちょうど門を出ようとすると、門の外で、中をのぞき込んでうろうろ偵察している男がいたらしいのだ。おまけに、お母さんを駅までずつと、右から左から顔をのぞき込むようにしてついて来たという。駅までくると、その男は引き返していったというのだから、嫌がらせ以外の何ものでもない。その直後、別の門徒女性が、法要に出られないからと、「志」だけ届けにきてくださったのだが、自転車で帰る道、今度は車で後ろからゆつくりゆつくり追跡されたという。どうも同一人物らしいのだが、後日、お参り先のある女性にお話すると「雇われたのかしらね、いやらしい！」と言われた。私を追放か屈服させんと奔走している男たちは、ほとんど白髪の年寄りばかりなので、五十代で黒髪で、背もスラツと高いというその男に、私は心当たりもなく、彼女の言うとおりかもしれない、とも思うのだった。

「報恩講」翌日、翌々日は、いつもながら村祭りだったのが、「御祝儀」の請求はさすがになかった。私はみこしかつぎの喧噪を耳にしながら、机に向かつていた。

法難を自己投資の好機とする

今回の事件は正に法難、宗教弾圧だと私は思っている。住職連も「役員」たちも、権力への民衆の抵抗運動である一向一揆を殲滅せんとするが如く、これでもか、これでもか、と四方八

方から圧力をかけ、兵糧攻めにする事によつて、一軒も参る所を無くし、精神的経済的に私を屈服させ、泣きつかせるか、追放するつもりだったのだろうが、彼らの期待に外れて、(「大無量寿経」にも道を求める行者をいためつける者は救いから除外される、と書いてある)講演依頼の仕事が結構入つてきて、私は今も無事息をしている。それどころか二割に減つた現在のお参り先は、気を張らない人たちばかりで、参るのが楽しく、二年にもなる尿療法も功を奏したのか体調もよい。久しぶりに会う「檀家」の人にも、よく「お元氣そうで。ちよつと肥えやはりました?」とやつかみ半分懐かしき半分で聞かれ、「わかります?」とニコツと笑つて答えている。また別の人に会い「パートに行つてるいう話やけど。夕方になつたら出て行かはるつて」と言われ、大笑いをしてしまつた。もちろん毎月貯金をおろす状態ではあるけれど、三年は自己に投資! と貼り紙をして自分を励ましている。

カトリックの雑誌に「PKOに従軍慰安婦を」の論文が平然と載せられたように、宗教が現実への批判感覚をマヒさせてるのなら、宗教なんてないほうがいい。そもそも宗教の「出家」とは、本当は「家」の思想を越え出ることなのだが、世の宗教はどれをとつても歎かわしい情況といえる。「歎異」——異なるを歎く精神、つまり世の現実を見てこれは真実と異なっている、こんなままであつてはならない、と歎く精神を失わないで、これからもやつていきたい。

*

ところで私の趣味はバレエとジャズダンス。踊る時、のびした指先を見るのではなく、指先の指し示すその向こうのはるかかなたを見ることで、観客はその踊りに無限の広がりと自信と

エネルギーを感じるのだ。

私、法名は蓮月。自分で選んだ名前。闇を破る月に照らされて、泥沼にこそ花を咲かせる白蓮華のように花を咲かせたい、との願いを託す――。

注 この伏線となった事情については、「91フリーゼミナール、活々と生きる」講演録にくわしく書いています。一冊三百円、ご希望の方は筆者まで。〒570 大阪府守口市橋波東之町四―三八 藤谷蓮月



植えつけられた“人格の身分制度”のなかで

渡辺 智子

「こう見えても俺」とこの先祖は武士だ」というセリフがいまだにはばをきかせています。士農工商は遠くすぎ去った過去の遺物のはず。それなのに「こう見えても俺」とこの先祖は百姓だ」というのでは自慢のセリフにはなりません。この身分制度のない時代に生まれ、確かに私たちは身分・職業によつて人を区別し、“下の者”をさげすんではいけないという道徳観念を教えられましたが、“上の者”へのあこがれは市民権を得て、今でも大事にされています。貴族に対するあこがれは別格ですが、手の届く範囲のあこがれとして、精神的武士が残っているように思います。テレビのチャンバラ番組などが見てのとおりですが、最近、学校の教育指導の一つとして武士道がとり上げられているようで、気にかかります。去年の高校の入学式には校長先生や教頭先生がしきりと文武両道を説かれ、学問にはげむ者は部活動もしつかりとするはずだ、と生徒と保護者を激励していました。出てくる言葉は「一生懸命がんばれ」とか、「学校の名に恥じないように」とか、「立派な人間」といったところです。聞いているほうも、これがまたたいして抵抗もなくその通りだと思ってしまうのは、これらの言葉が、よく聞

き慣れた「やまと魂」をゆさぶる言葉だからでしょうか。

でも落ち着いて考えてみれば、そのかつこ良い武士道の果てにはいったい何があるのでしょうか。テレビの中では討ち入りだつたり切腹だつたりしますが、現代版では何でしょうか。がんばつて受験地獄を生き抜き、企業社会に入つて日本の恥にならないように他の国に討ち入りすることでしょうか。また最近女性が大事にされるようになってきましたが、そのブームを一番嫌っているのがこの武士道ではないかと思ひます。いつもひつかかつてくるのは男性であるとか古い人間であるとかそんな部分の人びとではなく、日本人全体が持つている「やまと魂」、道徳観念となつたさむらいの精神ではないでしょうか。

私の生活は、半分が仏壇修復業、半分が浄土真宗の寺の坊守ぼうちう、という状態ですが、この真宗教団は、武家社会の中を生きぬいてきたものだけに、なおさらその名残を感じずにはおれません。

現在多くの新興宗教が出てきていますが、それらの宗教を批判する場合に一番言われることは、「新しく出来た怪しい人物の率いる集団で、お金がからんでいる」ということです。これは言い換えれば、自分たちの教団が歴史が古くて由緒正しく、お金もうけなどには無縁だということでしょう。この「由緒正しい」というこそ、貴族や武家の「本尊」であり、お金もうけはいやしいという感覚こそが武士道精神からきているように思えるのです。

ある住職が原発反対運動の話の中で、「原発反対を叫んで会社をクビになったら食べていけない。しかし原発が事故にでもなればそれこそ食べるどころの話ではない」という意味で、「どうせいつかは死ぬんだ、死ぬのだったらいつ死んでも同じだ」という言い方をされていました。

この「死ぬのだつたらいつ死んでも同じだ、いさぎよく死んでやるぞ」という精神、それこそさむらいだな、とむなししいものを感じました。命を守るための原発反対運動だと思つてゐるのに「いつ死んでも同じだ」とは。命を守り育てようという感覚、これをあえて母性とは言いにくいのですが、この死を怖れぬことをよしとする武士道、これはやはり男性だな、と、またまた考えてしまうのです。

このようなことが浄土真宗の精神だとは思いませんが、現に真宗教団の状況を見れば、いたるところに現われています。住職はミ二天皇制といわれる世襲制であり、住職の妻である坊守は、まさに武家の妻そのままの姿を要求されています。そのいい例（？）が藤谷不三枝さんの件で、不三枝さんに対する圧力はその延長上にあるといつてもいいでしょう。女は坊守たるべし、一步下がつて夫の影となり、しかもたしなみは忘れるなど。子どものない者は三年で去り（そこまでは言いませんが）、ましてや「嫁」にもいかなる者は遠慮して暮らせと。これらを一手に引き受けて反旗をひるがえしているのが不三枝さんだとすれば、それを弾圧、まさに弾圧という形で「正義」を貫いている人たちが立派なおさむらいということになるでしょうか。この出来事を、いいかげんに片づけてしまえという人、でも……と言葉をにこす大和なでしこ、あつちもわかるしこつちもわかるという知識人、いろんな人が何重にも周りをとりかこんでいるように思います。私もそんな一人でしょうか。

自分のことを考えてみると子どもの頃は男の子と遊ぶのが好きで、女の子らしく遊ぶのは苦手でうつとうしくて、それなのに「女の子はそんなことしたらあかん」としよつちゅういわれるものだから、ああやはりソンだ、男の人はあんまりだ、といつも思つていました。それが他

家へ「嫁」に入り、母となつて、ある日、気がついてみると、いつの間にかどんなことにも慣れつこになつてしまい、ずいぶんものわかりがよくなり、「嫁」は子どもを産む畑だぞと言われ、母というのは月のようにやさしくあるものだといわれ、妻は縁の下の方持ちがよいといわれ続けて、畑だ、月だ、縁の下だ、という、いろんな要求にこたえようと、けつこう努力している自分がいるのです。

一生懸命努力しては他人を見比べて、その努力のなさを批判しています。努力比べにはそれでよいという終点がないのです。この努力を「立派」という人もいます。でも立派な私は疲れるのです。しかもこの立派さは他人の目の届かないところでは全く無意味ではないかと思えます。他人と比べるところに価値があるものだからです。

今、子どもたちにこの立派さが要求されています。いまだに武士の精神が生き続け、貴族へのあこがれがマスコミの挑発によつて毎日私たちの感性におし寄せてきます。血統で貴族になれず、精神で武士に負け、ただ生活を守り、命を守り、女々しく不屈き千万と言われながら生きる私では、このままの自分を誇ることはできないのでしょうか。私たちは貴族や武家ではなかった自分を恥じ、立派ではない自分を捨てなければならぬのでしょうか。というより、自分自身が、自分を見捨てようとしていないでしょうか。いつたいいつまでこの「人格の身分制度」は続くのでしょうか。

逃げ場のないこの国の中を、自分と他人の間で流されたり逆らつてみたり、そんな日々の中で、何でもない自分のために、時には不良になり、ただ、命をも感性をも正義をも、武器にしたいくはない、と願うばかりです。

女住職への遠い道

真宗大谷派女性僧侶の「試練」

伊藤 景子

なんの信仰も持たない私だが、浄土真宗については、子どものころからいくつかの思い出がある。

初めて真宗と、その開祖親鸞に出会ったのは、小学校の社会の授業だったと思う。二十二、三年前になる。

「鎌倉仏教の中でも、禅宗は武士階級に、浄土真宗は最も身分の低い庶民の間に広まりました」

先生は、たしかこんなふうに説明してくれた。その日、家へ帰って親に、「うち、何宗？」と聞くと「真宗や」という答えが返ってきた。

「禅宗やつたら、かつこよかつたのに」
がっかりしたのを覚えている。

もうひとつの思い出は、高校二年の時。これまた倫理社会の授業である。

「善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」
有名な親鸞のこの言葉をめぐって、私たち生徒は、先生とちよつとした議論になった。

「悪事を重ねた人間がそのままで救われるなら、よくなるうと、がんばっている人間の努力が無意味になる」

生徒の多くはこう主張した。受験競争のただ中で、人より一点でも二点でもよい成績を取るために、あれもこれも我慢させられている私たちにとつて、のほほんど好き勝手している輩こそが救われる、などという教えは、あまりにも悲しかったのだ。

残念ながら、先生の答えは記憶していない。一生懸命、私たちに説明してくれたのは覚えているのだが。

長じて、私は新聞記者になった。あちこちの勤務地で、浄土真宗の、なかでも大谷派の若い僧侶と、たくさん知り合った。原発や差別に反対する運動を取材すると、しばしば、この宗派の僧がいた。皆、抹香臭いお寺の坊さん、というイメージからほど遠く、情熱的で若々しかった。仏教を、こんなにも生き生きさせることができるのか。とても新鮮な驚きだった。巨大な教団を抱える矛盾や、紛争に明け暮れた過去をへて、改革を目指す若い僧侶が育つていったのだろう。

かれらと話すうち、親鸞が、「善人なおもて……」の表現で、何を言おうとしたのか、おぼろげながらわかってきたように思うのだ。

浄土真宗との、三度目の出会いということになる。

僧侶はお経の配達人？

藤谷蓮月さん（三十九歳）も、そんな「らしくない」僧のひとりである。「現代人のための生きた仏教にしたい」と自分流の改革を進めてきたのだが、今、

檀家の反発に会い、一年以上も苦境に立たされている。

彼女のことを文章にするのは、これが三回目だ。前の二回と同様、やはり今回も、初めて会ったときの衝撃から書き始めないわけにはいかない。

八九年の夏。大阪市で開かれた、関西の女性労働者の集会だった。化粧つけない、ジーン姿の多い中で、蓮月さんはひときわ目を引いた。目の醒めるような紫のタンクトップ、黒い革の超ミニのスカート。ソバージュの髪をポニーテールにしていた。ピンクの口紅を引いた唇と、耳元で揺れていた巨大なイヤリングが、今もまぶたに焼きついている。

「真宗大谷派、覺了寺の副住職です」という自己紹介を聞いて、私は我が目を疑い、言葉を失った。同時に、胸がわくわくしてきた。この人の正体をどうしても確かめたくて、後日、私は覺了寺へ押しかけた。

大阪府守口市にある覺了寺は永正十三年（一五一六）の建立、と寺伝にある。樹齡三百年を越すクスノキが鬱蒼と茂っている。檀家は百五十軒。

蓮月さんは、この寺の次女に生まれた。本名は不三枝。府立大手前高校を卒業し、英語の専門学校に学ぶ。線香の匂いのする寺を嫌って飛び出したのが二十一歳のとき。大阪・ミナミのファッションビルや輸入レコード店で働いた。パンク風のファッション感覚は、このころに身につけたらしい。レコード店時代に、趣味のロック音楽を通じて知り合った恋人と一時はいっしょに暮らしていた。

しかし、二十五歳の時、父親の大円さんが胃潰瘍で倒れる。大円さんは七十歳になっていた。後を継ぐはずの兄は、サラリーマンとしての人生を選んでいった。仕方なく、という感じで蓮月さんは、寺へ戻った。軽い気持ちで仏事の手伝いを始めたのだが、いきなり、仏教とは何か、という大きな疑問にぶつかるのである。「お参りに行くとね、檀家の人はだれもお経を聞きに出てこない。だれもない部屋で、仏壇に向かって私が一人、ぶつぶつお経あげている。なんやこれは、僧侶はお経の配達人か、と疑問がわいたんです」

一念発起して、仏教の勉強を始め、大谷派教師の資

格を取った。二十八歳だった。

学ぶ中で、蓮月さんは、宗祖親鸞の生き方と教えに引きつけられていった。あの、善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや、の思想に、である。

「親鸞は、比叡山での修行時代、先輩僧たちが街へ出て女を買う姿を見て絶望し、山を下りた。女犯の戒めなんて建前は無意味や、好きな人と交わり、何でも食べるんが人間として自然である、と肉食妻帯した。『愛欲の広海に沈没し』との有名な言葉も残ってる。当時、悪人とされていた非差別階層の中へ、共感を持つて入っていった。自分も煩惱に苦しむ一人である、世の人とともに救われたい、と願ったんです。強烈でしたね、この哲学は」

そして、蓮月さんは、自分流の改革をどんどん進めていくことになる。

このころには、高齢の大円さんに代わって、仏事のほとんどを取り仕切るようになっていた。

取材のあと、夕暮れの本堂で、蓮月さんの勤行を聞かせてもらったことがある。張りつつやのある、朗々

蓮月流宗教改革

とした声だった。少し、エロティシズムを感じさせるような響きもあつた。「法悦」という言葉を思い出した。

さて、蓮月流改革とは、たとえばこんな具合だ。

私が初めて覺了寺を尋ねたとき、玄関の掲示板には、セクシャルハラスメントの新聞記事が張つてあつた。檀家の法事でもセクハラやPKO法案や環境問題や教育の話をするのだ、と蓮月さんは言つていた。法話の説教師に、女性問題の専門家を呼んだ。

何を言っているのかわけのわからんお経では、生きている人に聞いてもらうのに意味がない、と口語に読み下したお経を読み上げることもあつた。

すべて、「権威を排し、民衆とともに生きよ」という宗祖の教えを自分なりに実践したつもりのことだったのだが、檀家にはすんなりとは通じなかつた。蓮月流改革は、檀家の言葉を借りればこうなる。

「蓮月さんは、日本は今でもアジアを植民地にして

います、というようなことを言わはる。けつたいなお坊さんですわ」

「代わりに月参りに来た友人のお坊さんが、月参りの読経の後で、死刑反対かなんかの紙を持つてきて、署名してくれ、言わはつたこともある。お寺さんのお勤めとはちよつと違ふと思う」

「厳肅な法事で、口語のお経を上げられた。親戚の前で恥かきましたわ」

「法事のあとの食事の時、あの人は「支度を女の人だけがするのはおかしい。男の人も、お茶くみなさい」と言う。親戚に失礼になつたらいかんから、と外食にした家もある」

「うちのおばあちゃん、蓮月さんの話聞いてびっくりして、「あんた、共産党だつか」と尋ねてました」

「葬式にラメ入りの派手なリボンをつけてくる」

非難は、仏事以外にも及んだ。

蓮月さんは、ジャズダンスが趣味である。毎年正月、本堂で開かれる檀家婦人会で、それを披露する。私も一度招かれたことがある。本尊を背に、ヒョウ柄

のスパッツをはいた蓮月さんが、軽快に、所狭しと踊りまくと、ヤンヤの拍手が起き、檀家の女性たちも一緒に踊って踊っていた。このときは、テレビ局も取材にきていた。

だが、「仏に仕える身としていかがなものか」と眉をひそめる向きもあつたようだ。

「本堂であぐらかいてはつた」といううわさも飛んだ。

九一年十二月、住職の大円さんが死去した。

真宗大谷派はこの年から、それまで男性に限られていた住職への道を、女性にも開くことを発表していた。実は、これも蓮月さんや、志を同じくする坊主^{ぼくし}さんたちが、長年続けてきた運動の成果なのである。

最も卑しめられている者をこそ救わん、とした浄土真宗大谷派も、なぜか女性とは別だった。^(注)

得度できる年齢が、男九歳、女は二十歳。親鸞の説く「変成男子^{へんじょうなんし}の願」とは、女はいったん男に生まれ変わって初めて成仏できる、との意味である。蓮如の「御文」には、あの有名な「それ女人の身は五障^{ごしょう}三從^{さんじゅう}

として男子^{なんし}にまさりてかかる深き罪のあるなり」がある。

蓮月さんらは、「真宗大谷派における女性差別を考えるおんなたちの会」というのを作って、女は住職になれない、とする教団の法規に異議申し立てをしてきたのだった。教団が、法規を改正したのが九一年度。

偶然のことだが、蓮月さんは、大谷派約四百年の歴史の中で、初の女性住職になるはずだった。

しかし、檀家は寺が教団に提出する「住職任命申請書」に檀家総代のハンを押すことを拒んだ。理由は三つ。蓮月さんが法事にしばしば遅刻し、すっぱかしたりする。法話に呼ぶ説教師が偏向している。九〇年、本堂を檀家の了解なしに九州の反原発グループに貸した。

この三点についての誤りを認めない限り、蓮月さんの住職就任を認めない、というのである。

九二年十月には、檀家の総会を開き、住職就任拒否を決議した。

大円さんの死去で、蓮月さんへの不満が一気に吹き出したかたちだ。

特に、九〇年春、大阪で開かれた「国際花と緑の博覧会」に抗議行動のためにきていた反原発グループを、本堂に泊めたことへの、檀家の反発は大きかった。

「ある日、寺をのぞいたら、髪の毛がボサボサのヒツピーみたいな、このへんでは見慣れん人たちがいっぱいいたむろしている。へんな太鼓やプラカードもある。寺は村の財産。勝手に得体の知れん人を連れてくるなんて」

檀家一同、黒船が来たような大騒ぎだった、という人もいた。

守口市は、都心に近いが、歴史の古い町である。かつては、宿場町として栄えた。檀家の人がここを「村」と表現するのにはちよつと驚いたが、古くからの住民が多い。特に、覺了寺のある一帯は、歴史のありそうな重厚な家屋が並んでいる。

「変わったことはしていらん。穏やかな寺であつてほしいんです」

檀家のひとりという。

蓮月さんは、遅刻などは、以後気をつけて改めるが、あとの二点は、寺の命と魂に関わることだから、絶対譲れない、と言う。

「私へのいろいろな非難もちよつと考えたら、おかしなことも多い。たとえば、ラメ入りのリボンして葬式に来た、て言いますけど、葬式の時に僧侶が着る七条袈裟のきんきらきんの派手さをごらんさない」

檀家のなかには、むろん、蓮月ファンもいる。ある女性檀家は、

「寝る所に困っている人がいたら、泊めてあげるのが、本来 お寺の役目。蓮月さんがしていることは、親鸞のいうてはることと同じやと思う。話もわかりやすくしておもしろい。お経だけ勤めてすむお寺さんやつたら、テープ流して聞くのと変わりません」と言つた。

こんな声はしかし、なかなか大きくならない。檀家の総会は、蓮月さんの月参りの拒否も決めた。

「ほんととはこれまでどおり、蓮月さんに来てもらいたいのやけど、本家がうるさいから」

と泣きながら断わってきた人もいる、という。月参りに行く檀家の数は、以前の二、三割に減った。

蓮月さんの知人の僧侶は心配して、

「したいことは住職になつてからいくらでもできる。

それまでは辛抱したら」

とすすめる人もいたが、

「どんな段階でも志に背くことはできない」

と蓮月さん。

社会的な活動に熱心な僧侶の多いことで知られる真宗大谷派で、寺と檀家がこんなにもめているのはあまり聞かない。

「私が男なら、檀家が『若^{わか}、もちよつと氣をつけてくださいよ』と苦言を呈する程度ですんだかも」

とも蓮月さんは思う。

トラブルは、一年をへて、なお膠着状態である。教団も依然、静観の構えだ。だが、一方で、騒動を知った遠方の人から思いがけぬ月参りを頼まれたりすることもある。蓮月さんは、

「法然、親鸞師弟が、布教の初期に古い仏教勢力や

朝廷から弾圧を受けた時の試練に似ている。私自身、試されているんだと思います。自分を磨く時なんだ、と思い定めるようにしています」

(朝日新聞記者)

(注) 女性の得度の年齢は、筆者の執筆時には二十歳だったが、その後九歳に引き下げられた。

(月刊「ナム」) 1993年7月号 (水書坊刊) より転載



蓮月さんのお話を聞いて

蓮月さんと出会う

澤田 和子

昨年暮れ、突然に、東京の事務局から、「大阪の方から原稿が届いたのでへあこら大阪」で三月号か四月号の編集を受け持つてもらえないだろうか」との連絡があつた。そして数日後、書類がどつさり届けられた。守口市在住の女性僧侶藤谷蓮月さんの手記「一向一揆のパワーを今一度!」と、それについての資料であつた。これを大阪のメンバーで読んで蓮月さんと座談会をし、まとめてもらえないかということだつた。

「宗教と女性差別」は共に大変重い内容であり、どちらかといえば私の苦手な分野であつた。断りたいと思つたが、いつも全力投球しておられる斎藤さんと編集部之苦勞を知つていたので断り難く、何事にも樂天的な私は「何とかなるだろう」と引き受けた。

蓮月さんに連絡をとり、二月十三日に彼女の寺・覚了寺で開催を準備して、大阪在住のへあこららの会員に郵送で連絡した。まずこの問題に興味のある方は、彼女の文章をコピーをして送るので、連絡をほしいとした。三名の方より連絡が入り、文章を送付した。しかし、私の設定した日程では全員参加できず、座談会は延期となつた。

吹田市に在住の小谷さんが、蓮月さんのお話をどうしても聞きたいとのことで、直接連絡を取っていただいて、吹田市で講演会が開かれることとなった。へあごらのメンバーのうち、先に連絡をしたとき興味を持たれた方にのみ再度郵送で通知を出し、私もこの会に参加させていただき、蓮月さんとはじめて出会うこととなった。

場所は吹田女性センターの一室でへいんぐすサロン〜という吹田市在住の女性グループが用意された静かな環境の素敵な部屋であった。

各地の「婦人会館」が「女性会館」に名称が変わったり、大阪府内でも「女性センター」が次々新設されて、女性をとりまく情勢は変わりつつある。大阪市立婦人会館を活動拠点としている私の所属へ夕陽ヶ丘女性史グループ〜も十余年の歴史があるが、去年、少ないメンバーのうち二名が病死、そのショックからいまままでのようにテーマを定めての学習が休止となっている。私自身は平和運動に取り組んでいたので、久しぶりの女性問題であった。

受付で、色の濃いサングラスをした黒っぽい服装の女性に出会った。これが蓮月さんであった。サングラスをはずされ自己紹介の後、少し話をする。文章と写真から連想していたイメージとは合わず「カワイイ!」と思わず口にてたほど、笑った顔など親しみのある明るい女性であったのに、まずびつくりした。

へいんぐすサロン〜では、私たちへあごらのメンバーと男性一名を含めて三十数名で、皆さん熱心に聞かれていた。講演のあと、お茶とお菓子をいただき質問時間があつた。蓮月さんとの出会いの場所を提供してくださったへいんぐすサロン〜の皆さんに感謝するとともに、サロンの素敵なメンバーの今後の活躍を期待している。

当日の感想を、出席者の中のへあごらのメンバーと、へいんぐすの山本さんが、それぞれ五日間で書いてくださったので、お目にかける。

スパッツをはいた女性僧侶

大音美弥子

蓮月さんは、世をはかなんだ尼さんではない。病で倒れた父・住職の手伝いをしたいというのが、俗名・藤谷不三枝さんが仏門に入るきっかけだった。

吹田市立女性センターで五月二八日に開催された「いんぐすサロン・とっておきの話」の会は、＼楽しいおしゃべりとおいしいお茶、ゲストの生き方にふれるひととき＼と銘打ったティーサロン形式による講演会の試みである。その第一回目のゲストとして、浄土真宗大谷派覺了寺僧侶の蓮月さんが登場した。

脱色したベリーショートヘアに赤い革ジャンパ、黒のスパッツに爪先立ちシューズで決めたスリムな身体。街で見かけて、僧侶と思う人はまずあるまい。どう見ても、ロック・バンドのヴォーカルか、アングラ劇の役者さんのようだ。この一癖も二癖もある

女のお坊さん、いったい何を話すのだろうか？ 「女の視点で宗教を射る」って、なんなの？ おつかなびつくりの視線に取り囲まれて、蓮月さんは淡々と話し始めた。

親に与えられた名前から自分で選んだ法名への話。趣味でやっているダンスや英語教室の話。偏見の多い「ムラ」での迫害。それが、いつの間にか「変成男子」の恐るべき差別和讃（女性はいったん男子に転生しないと、仏に救われないうのだ！）や、全米を揺るがした夫婦間レイプ裁判の話へと自然に結びついてゆく。

蓮月さんの話は、背伸びをしない。自分の身のまわりで起こったことを、常識や因習で判断せずに、ひとつひとつついでいねいにはどいてゆこうとする。それを問題意識と呼ぶ人もあるが、「縁によつて、いろんな可能性や危険性に気づいたわけです」と、彼女は言う。

形式だけで心のともなわない「月参り」が疑問の第一歩だった。檀家で法話をしようとして、「いや、それは結構です」と断られた経験。お経を配達して、集

金するのが僧侶だろうか。「用事」と化した法事を仕切るのが女性の役目なのだろうか。「仏さんにはお経がなによりご馳走です」と言い続け、民衆と仏教の距離をかえつて広げるような坊主ではありたくない。

おかしいと思つたことに「なんで？」と言わずにいられない。納得するまで退かないのは、強烈な生き方へのあこがれがあるからかもしれない。そうした姿勢への反発と「女性の住職は要らん」という偏見が、彼女をボイコットされた僧侶に仕立てあげた。ジャンヌ・ダルクになぞらえたテレビ局もあるほどで、たしかに「出る杭は打たれ」ても、打たれることによつて初めて変わる固まつた状況が、人の眼にふれることになつたのは事実だ。だが彼女自身の生き方は決してかたくなではなく、むしろ意外なまでに素直なのだ。

会場からの質疑応答の場で、蓮月さんの本領はさらに発揮された。肉親の死を乗り越える手助けにならないう現在の仏教への疑問。中絶の是非。一人ひとりが抱える悩みに対して、白紙の状態からいっしょに考えようとしてくれる人である。「失敗やあやまちに引き寄

せられるのは縁であつて、罪ではないのです」現代の言葉で仏法を説く蓮月さんに、期待をかける女性の数は、まだまだふえそうだ。

魅せられて

小谷 訓子 みち

■ 出合いのきっかけ

一月はじめに「へあごら」の吉田悠子さんが、「大谷派の女性僧侶蓮月さんという方が書かれた文章を読んで見ますか」とお声をかけてくださいました。ちょうど「ずっと住みたいね吹田 私の街の輝く女性たち！」という自費出版の本（市の女性セミナー修了生グループ・プッじゅねつと・すいた）が百人の女性にインタビューしたもので、それに興味がわかなかつたのでせつかくでしたがお断りしました。それからしばらくして、

忘れかけていた頃に改めて〈あこら大阪〉の澤田和子さんから「蓮月さんのお話を聞く会」のお知らせをいただき、同封されていた細かな字で綴られた手記の一部のコピーを読み、大阪に蓮月さんなるユニークな人がいらつしやることをはじめて知りました。「すごい人やなあ!」と圧倒させられ、なぜかとても興味をもちました。「ぜつたい集会に行こう」と思いワクワクした気持ちでいました。ところが急に用事ができて行けなくなりましたので、せめて資料だけでも、とお願ひして送っていただきました。後で流会になったと聞き、ほつとするやら残念に思うやらでしたが、届いた原稿は圧巻でした。

私の関わっているグループの一つ「いんぐす」の今年度の企画で、会いたい人・聞きたい人をリストアップすることになったとき一番に浮かんだのが蓮月さんの名前でした。アウトラインを話すとみんなが興味を持って、「おもしろそう」と全員一致で決まりました。

「いんぐすサロン」と銘打つての企画の第一回目のゲストとしてお願いしましたところ、快く受けてくだ

さり、私たちの出会いが実現しました。

■ イメージの一人歩き

書かれたものや聞いたりしたことから勝手に蓮月さんを「超過激な人」だと想像していました。でも電話での感じでは「気安く話せるフツツの人」みたいだし、「どんな人」が「どんないでたちで現れ」「どんな話が飛び出すのかしら」と、とつてもたのしみでした。

当日さつそうと黒い服装で現れた姿は「イメージ通り、きまつてるネ!」「カッコいい!」。ところが黒いサングラスを外された目の前の蓮月さんは、強烈な感じにはほど遠く、意外と小柄で、とてもやさしい目をされた素顔が美しい女性で、よくわからないけど仏さまに似た、なんともいえない雰囲気をもった女性、それでいて威勢のよいことばもポンポン出るし、意外性にびつくりし、出会いはまさに「感動もの」でした。

■ 幅と深みのあるお話

お話の中で印象に残っているのは、宗教というもの

が社会制度や人間関係などのしがらみ以外に、心の分野であるだけに、どれほど人間を、いや女性を呪縛し、苦しめているかということをやインドや他の国の事例を紹介しながら話されたことです。

宗教というものは、ふだん葬式仏教ぐらいしかつきあいがいい私には、宗教感覚も宗教心もなく、日々の生活の中にも精神的な面でもあえて必要としないテーマでした。でも話を聞いていて「わかるなあ」と思いました。「宗教」のとらえ方が狭すぎたし、遠くのものであり過ぎたことに気づき、死ぬときだけ問題にするのではなく、人としていかに生きるかを考えることに繋がっているように思いました。

■ 出会えてよかった

さまざまなアレルギー症状が起きている蓮月さんの状況はしんどいけれど、変化・変革を好まず、「和」思想幻想に凝り固まり、権力を膏^{かさ}にきいている地域の男社会・仏教界を、飽きずに懲りずに揺り動かし続けてほしいと思いました。応援したいものです。

女性の視点で語られる仏教、説法があちこちで広げばおもしろくなりますね。そういう方となら毛嫌いせずにお寺さんともよき友としておつきあいできそう。「超過激」を想像していたので、飾りつけのないそのまんま、その穏やかな、あたたかい笑顔と表情に「意外さ」を正直感じましたが、内心そういう方でよかったと思っています。ステキな方との出会いに感謝!! です。

会ってこそ伝わる人柄

山際美代子

澤田さんからの連絡で初めて蓮月さんのことを知った。蓮月さんの原稿やご自身で発行されている機関誌など読ませてもらって、勇気のある人だなあと興味をもった。周囲の友人に尋ねてみると、すでに彼女のことはよく知っているという。同じ大阪にいながら、疎いことであつた。

吹田の女性センターで会った第一印象は意外で、書かれたものや 彼女の紹介記事に冠せられる過激？な修飾語とはおよそ正反對の、地味でそそとした感じ、腰の低い人であつた。語り口は穏やかで、説得力のあるのはさすがと感ぜ入る。目尻にしわをよせて笑う顔も人なつっこい。

宗教のとくに宗派に関しては、私自身はノンポリでいたいと思つているが、葬式に始まつて法事、祥月参りなど現実の生活では習慣化している行事に、幼いときからしつかり取り込まれてゐる。そして考え方も深いところで根をはつていて、意識的に「差別」と顕在化させることがなかなかむずかしい。一方で坊さんといえ、仏壇の前で言語不明瞭なお経を唱えてお布施を受け取つて帰る人、という認識以上には出ていない。時たまお参りのあとで話を聞かされたりすると、あれつと驚いてしまつたりする。

彼女が糾弾しているように、仏教には女性差別が根強くあると思う。身内の葬式でも場面場面で矛盾を感じることがいっぱいあるのに、女の立場でやり過こし

てしまつていくことは多い。しきたりの一つ一つを検証していくことが、差別に対する草の根の運動になるだろう。

予定時間をはるかに超えても質疑に発言を求める人が絶えず、丁寧に真剣に受け答える彼女を見て、ぜひまたの機会をつくつて蓮月さんの「法話」を聞きませんか、とよびかけてしまつた私であつた。「あごろ大阪発信」としてまとめるというきつかけが、へいんぐすサロンへの企画によつて蓮月さんに出会うことができ、思わぬ新しいきつかけをつくつてしまうことになつた。

彼女の場合、会つて直接話をする、聞いてみるのが一番だと思う。矛盾に感じていることのさまざまを語り合うことによつて解きはぐしていく――、本来宗教者というのはそんなものではなかつたのだろうか。

蓮月さんの課題

山田 和枝

百聞は一見に如かずというが、百説は一聞に如かず——それが蓮月さんの印象だった。

そのいでたちで参加者を驚かせ、あるいは印象づけ、黒メガネを取ったあとの、さわやかな語り口とあどけなさで人の心をそそる。蓮月さんの文章で予想していた印象は、一瞬にくつがえされた。

見事なカリスマ性を持った人だ。

そのお説も、まさに「説教師」にふさわしい。

ほとんどの参加者がそうであつたように、私もすっかりシビれて帰った。

しかし、一日たち二日たち、ハイになつていた心が落ち着いてくるにつれ、もうひとつ疑問が起きた。

あれほどのカリスマ性、あれほどの説得力を持った人の言動が、なぜ、地域の人の心を動かしきらないの

だろうと。

日蓮さんにしても、一遍さんにしても、その説が真実であつたからこそ大きな迫害に遭つたが、迫害を撥ね返すだけの民衆のエネルギーにもなつた。

蓮月さんに加えられている迫害は、仏教界の体質だけが問題ではないだろう。地域に根づいている草の根女性蔑視、——それこそが大きな問題だと思ふが、日蓮さんや一遍さんに加えられた偏見も、恐らくはそれと変わらないものだつたらう。また、政治的な圧力は、蓮月さんへのそれとは比べようもないほど大きかつたらう。

しかし、だからこそ、日蓮さんや一遍さんと共に闘う人の輪もふくれ上がったのではあるまいか。

ほとんど孤軍奮闘する蓮月さんの話は、ストーリーリ―としてはおもしろい。しかし、私は、「なぜか」を考え続けたい。

それこそは、私たちフェミニストが、重く受けとめ、考えなければならぬ問題なのではなからうか。

会って感激

山本 瑛子

今までの講師には思いもなかった「出で立ち」から興味津々。でも黒の上下は、一皮むけた蓮月さんを見るようで、かえって眩しさを感じました。

「檀家からの突き上げ」の話から性差別・部落差別、はたまた「バビット事件」（レイプ夫のペニス切り落とし事件）に至るまでの熱のこもったお話と蓮月さんの魅力にどんどん引きつけられていきました。

「救われるはずの宗教から縛られることになる……」なるほどなあ、わかるわあとうなずくことしきり。キリスト教を選んだ私だけけど、もし若くして蓮月さんに巡り逢っていたなら、仏教を選んでいたかもしれないと思わせるほどわかりやすく、暮らしの中の仏教のお話は共感を呼ぶものでした。

蓮月さんのお話に魅せられてか、サロンという形式

をとったからなのか、矢継ぎ早に意見や質問が出ました。雰囲気はますます盛り上がり、予定の時間を延長しましたが、それでもタイムオーバーとなるほどでした。みなさんの熱は冷めやらず、思いの残った方々はロビーで蓮月さんを囲んで話し合いは続きました。

（いんぐす）の仲間も、久しぶりに企画のやりがいを感じ、みんなの心はハイになり、六時過ぎまで次回のチラシ作りなどをやりながらも、夫や子どものことを忘れていたかのような土曜日の午後でした。

（グループへいんぐす）

今度は部落問題を語り合いたい

吉田 悠子

気持ちの整理をつけないければならないことがいろいろと重なっていたとき、澤田さんと小谷さんに誘われ、友人一人を連れて蓮月さんの講話会に行きました。

お話を聞き、お姿を見ているうちに、私が「あこ

ら」を読んで感じていた人とはちよつと違う、と思うようになりました。さつぱりした、とてもまじめに生きている人という新鮮な感覚、私たちがともすれば失つてしまつてゐる原点のような精神を持ち続けている人。「この人はいい人だな」と思いました。

私が宗教にあまりこだわらない生き方を選んで来たのは、建てて十六年になる我が家に仏壇がないせいもあります。私の中で、宗教に対するある種の決断があつたからです。一九八九年、〈あごろ〉との出会いがあり、長野での夏合宿で、もろさわようこさんの

〈歴史のはじめの家〉へ行つたことがきっかけで、翌夏また〈はじめの家〉の集会に参加して望月町のお墓にある差別戒名を見ました。墓標に刻まれた「皮女」とかの戒名を見て、部落出身者は死んだ後も差別されるシステムになつてゐることがわかつた時から、仏教に対する幻想は消えました。

澤田さん・小谷さんのおかげで、とてもステキな蓮月さんにお会いできたことを感謝しています。蓮月さんとは、部落問題を含めて、またお話ししたいと思っています。

95世界女性会議「北京会議」に行きませんか？

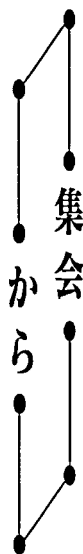
来年は北京会議。〈あごろ〉では、メキシコ、コペンハーゲン、ナイロビと、毎回ツアーを組んで来ましたが、今回も、ツアーを計画しています。

今度は社会主義国、中国。民宿は許されないとのことですが、この機会に、会議が終わつてから、いろいろなところを巡り、中国やアジアに対する理解を深めるとともに、日本の戦争の意味を改めて考えたいと思います。

こついうところに行きたい、ここがいい、など、みなさんの情報やお知恵をお待ちしています。実行委員を募集中です。どしどしご連絡ください。

T160 東京都新宿区新宿1-9-4-303

あごろ 〈中国の旅の係〉



文玉珠さんの貯金を返して！ ムンオクジュ

従軍慰安婦の軍事郵便貯金を支払うための立法化をめざす会

4月28日、東京杉並の阿佐ヶ谷で、「元従軍慰安婦」文玉珠さんの軍事郵便貯金支払いを求める会（代表廣崎リュウ・下関市）の森川万智子さんの話を聞く会が開かれた。

まず各地で起こっている様々な補償要求運動、貯金払い戻し請求運動、慰安婦にかかわった元兵士らの証言などをまとめたビデオが映される。老いた文さんは、一九九二年三月、あの一八歳の日にまとったであろう薄桃色のチマチョゴリで下関郵便局を訪れた。「（貯金）原簿はありません」と居丈高な日本政府の末端役人。熊本貯金事務センターに至っては、業務の迷惑とばかりゲートを閉めて、面会も拒む有様。

旧日本軍は侵略各地に野戦郵便局を設置したが、文さんは一九四二年にビルマに連行されタイで解放されるまで、各地を転々とさせられる間にチップを貯金、通帳は紛失したが、故国の父母に五〇〇〇円を送金し、預金残高は七〇〇〇円

ほど、「貯金の本局は下関」という軍人の言葉まで、文さんは几帳面に覚えていた。記憶にある「文原吉子」名義の預金原簿はなかったが、「文原玉珠」名義の原簿はみつきり、六五年三月までの元利合計は五〇、一〇八円にも達していた。支援グループでは支払いを求める裁判を準備中だが、日本の裁判の遅さと文さんの高齢を考えると期待できない。

文さんの場合は「日韓請求権協定」とこれに基づく国内法第一四四号が不払いの根拠とされる。法的に支払う義務があると認めている台湾の二万七千におよぶ預金者の要求にも、郵政省は「払い戻す手続きがまだきまつていないので払えない」と通知。政府は確定債務とされる郵便貯金、簡易保険、郵便為替、郵便年金、未払い給与、恩給の上乗せ額について検討中だが、戦時国債、軍票の補償などへの波及をそれぞれ先延ばしし、銀行や生命保険は国の出方を待っている。

そこで、「国家が納得すれば個人の問題は消滅するという考えを改め」（外口玉子前衆議院議員）、障壁になっている「法律第一四四号を適用せずに個人の債務は支払う」という特別立法が必要になる。が、折悪しく「解散」風のなか、立法化は困難な状況にある。支援運動をひろめ、世論を高めようの声が起こった。

（高野ゆう子）

探偵小説の女性主人公

平尾 幸子

(ジャパントイズ大阪支社編集部記者)

小説の主人公は時代を反映している。

私は、女性探偵が活躍する推理／探偵小説が好きで、数年来、好んで読んでいます。一時は、ほとんど中毒のようにシリーズものを次から次へと読んでいたので、私の頭の中は、殺人とか、骨とか死体ばかりだった。

私の場合、最初にアメリカの作家の作品から読み始めたので、今でも、読む作品の大半はアメリカの作品が多い。

主人公を思い出してみると、読み始めた数年前は、やたら強くて勇ましいキャラクターが多かった。彼女たちは、空手の達人だったり、錠破りの名人だったり、私の友達には、絶対に存在しそうでいない人ばかりだった。

中でも、最初のころに読んだ、サラ・パレツキーという人の作品に登場する主人公V・I・ウォーショースキーは印象的であった。外国への憧れも手伝って、衝撃的というか、すごく新鮮に感じた。映画化されたので、ご記憶の方も多いと思うのですが、何とも勇ましい人なのです。

アガサ・クリステイの作り出したミス・マーブルのように、推理で謎を解き、事件を解決する探偵と違って、ウォーショースキーに代表される現代の女性探偵たちは、行動的でかなり攻撃的である。

でも、ここ最近読む推理／探偵小説の女性主人公は、スーパーウーマンのようなイメージは消え、ぐつと人間くさくなってきた。定職を持たない夫に悩まされる主人公だったり、お姑さんに手を焼いたり、家庭と仕事の両立に悩んだり、キャラクターが柔らかに、そして、よりバ

ラエティーに富んできているように思う。(より現実的に、より普通になりつつあると言つても、推理／探偵小説だから、起こることはたいい殺人で、一般の人が繰り返し出会うような事ではないという制限はあるにしても。)

どうして、変わってきたんだろうか。

読者が、あまりにも強すぎる探偵に飽きてしまったのか、それとも、いくらアメリカとはいえ、自分たちの日常生活とかけ離れたこういう女性たちにいや気がさしてきたのか、理由は不明だけれども、とにかく変わってきている。

主人公の事件への関わり方もより多様になり、私立探偵、警察官、事件記者以外の分野で働く人が多くなってきた。たとえば、日本でもよく売れたと聞いているパトリシア・コーンウェルの描くケイ・スカーペッタは、州政府に勤める検視官として、彼女の仕事のなかで事件に携わっていく。

これは、女性の進出分野が広がってきていることを反映しているのか、それぞれの分野で働く女性が補助的な仕事からもつと主体性のある地位についていることを反映しているのか、それとも、将来、そのようになることを示唆しているのか。

私は、女性が主人公の推理／探偵小説をもつと読みたい。外国の作品であろうとも、日本の作品であろうとも構わないから。そして、何でもできてしまうスーパーウーマンや、読んでいて歯ざしりしてしまうほど忍耐強い女性でなく、いろいろなキャラクターの女性がさまざまな分野で活躍する小説を読みたい。

In an awesome spectacle of transformation, South Africa sweeps away the vestiges of apartheid and marches toward equality.

「変革へのおこそかさの中で、南アフリカはアパルトヘイトの痕跡を払い去り、平等へと進む」

これ以外にも関連記事は沢山あるのだが、Apartheid は“Time”の記事にはほとんど使われていない。もうすでに手あかのついてしまった語の部類に属すようだ。80年後半から90年にかけて、メディアは競って南アのアパルトヘイト問題を報道した。当時どちらを向いても、紙面はアパルトヘイトだった。わずか十年あまりで、隔世の観がある。

「長く閉じこめられていた黒人居住区“抑圧のゲットー (ghettos of repression)” から、自ら治める場“ガバメント・ホール (halls of government)” へ黒人 (black majority) は足場を移したが、前途は多事多難」——に始まって、

「白人の既得権を譲ろうとしない頑強 (diehard ダイハード) な覇権主義者の醜い争い」の説明のついた K・K・K (クー・クラックス・クラン) 顔負けの黒づくめの右翼過激派グループ。新国家建設の意欲が伝わってくるような、投票を待つ人々の長蛇の列。投票妨害か、幾つか起こった殺人事件。「穏健派マンデラ氏のグループが、十分実績を挙げられなかったら、南ア国民は、もっとラディカルな指導者の許へ走ってしまうかも……」の将来展望に至るまで、アパルトヘイトは使われていない。文中に Apartheid was gone のように散見されるのみである。

次週5月16日号は、次期大統領へのインタビュー。5月23日号は、就任式の模様が伝えられているが、見出し、小見出しに、この語が使われることはない。飽きつぱい読者の気持ちに比例して、ことばの持つ生命も移ろいやすいのかもしれない。ただ、世界へ向け命がけで支持を訴えなくてもよくなった現状と抱き合わせるとき、この言葉がインパクトを失ったのは大歓迎と言うべきだろう。

“Guns will never stop us.” と、こぶしを握りしめたナイロビ会議の彼女たちの顔は、今も声と一緒に浮かんでくる。「良かったね。おめでとう。本当によく頑張りました」と声をかけたくなる。でも彼ら、彼女らの本当のたたかいは、これからなのかもしれない。

アパルトヘイト (Apartheid) I

奥川 睦

「南アフリカ共和国における黒人および有色人種に対する人種差別政策」(広辞苑)のこと。

アメリカにおける黒人の公民権運動が標的として撤廃を迫ったのは、segregation (人種隔離・人種差別待遇) だった。この単語をそのまま踏襲しなかったのはなぜか？

Apartheid が意味する人種隔離は、単なる人種差別ではない。有色人種と白人を、その居住地で、職業で、また交通機関はじめあらゆる公共の場で「決して同席させない」強い差別であり、この概念は、英語の Segregation に含まれる人種隔離の範囲では説明しつくせない。南アフリカの公用語〈アフリカーナ〉(旧宗主国オランダの、オランダ語を基本にした南アフリカ特有の言語)である“Apartheid”でしか、表現できなかったからだと思う。

ちょうど、イタリア語のゲットーが、英語の中に ghetto (ユダヤ人居住区・特殊集団・孤立集団) として入ってきたように……。

1985年、ナイロビの世界女性会議、NGOフォーラムで、「南アからの報告」というワークショップに出た。南アフリカからの発表者が発音するアパセイドが「ああアパルトヘイトか」と気づくのにはしばらくかかった。スペルを確認して apart に気づき、やっと腑に落ちた。

日本人は、外来語を受け入れるとき、ナショナル (英) とかアンニユイ (仏) とかアルバイト (独) とか、もともとの原語の発音のまま“日本語”にしてしまうことが多いが、英米人は、ほとんど自分たち流に発音する。Apartheid も辞書の発音記号 [apa:theit] [apa:θeid] と発音されているようだ。

逆引辞典を引いてみても、英語の中に——heid はあまり見つからない。separateness (離れていること) と同義、と辞書は説明しているが、古い辞書だと記載が無い。この言葉が流通し、英語市場に登場したのは、ここ十五、六年くらいのことではないだろうか。

雑誌“Time”は、5月中、南アの記事満載で、特に5月9日号はネルソン・マンデラ師がカバー・ストーリーだった。Cape of Good Hope (「喜望峰」にひっかけ、「嵐の岬」ではない「希望の岬」南ア連邦) の head line (大見出し) の後の小見出し：

伊丹十三の ポストモダン映画 II

プリンドル玉枝

ラーメン西部劇『タンポポ』の状況設定

伊丹の二番目の映画「タンポポ」は、食べ物の百科事典というか、伊丹に言わせると「ラーメン・ウエスターン」だ。この映画がウエスターンなのは、「シエーン」や他のウエスターンがそうであるように、カウボーイ（五郎）が、ある町（タンポポの店）にふと現われ、その町の問題を解決して、またふと消え去っていくからだ。「タンポポ」のカウボーイは、馬の代わりに牛の角をつけたミルクトラックに乗って訪れる。この程度の差異は面白おかしく見逃さうとでもいうことだろうか。このような西洋と東洋の混乱について、リンダ・ハッチエオン（Linda Hutcheon）は次のように述べている。

これは、古来のウエスターンとイタリアのスパゲッティ・ウエスターンをひつくるめてラーメン・ウエスターンとしたものだ。こうしてジャンルとか表現法とかの既成の協約を利用することによって「タンポポ」は観客の心理をある一定のところへ持つていき、そ

これから徐々にその既成の協約をとり壊してゆく。これは、ポストモダン式のパロディーである。(Hutcheon, P. 114)

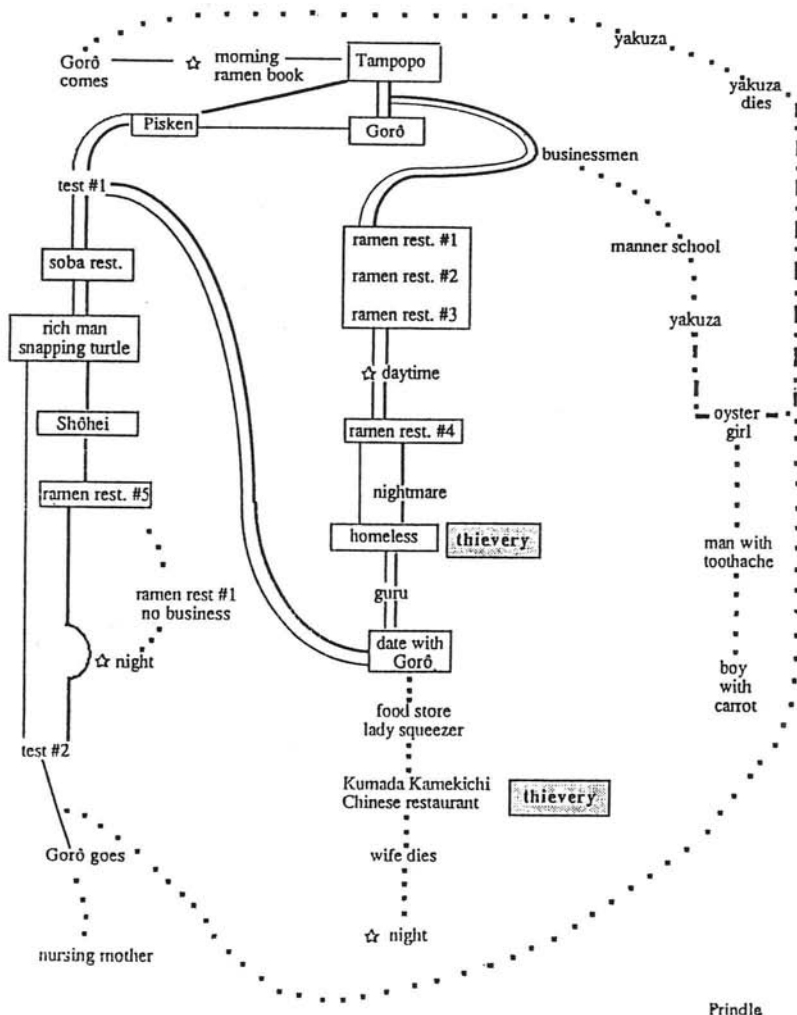
「お葬式」と同じように、この映画も伝統の規約を乗り越える点でポストモダンと言える。登場人物も、観客も、雑多なメッセージが飛び交う錯雑な関係網の真つ只中、つまり、リオタード (Lyotard) が言う意味でのポストモダン環境内に置かれている。食べ物を例に上げると、言葉として言われたり、画像として出てきたりする食べ物の種類は約四十種——フランスパン、ラーメン (約十種)、御飯、漬物、納豆、秋刀魚、平目のムニエル、コンソメスープ、野菜サラダ、リングとくるみのサラダ、キャビアソース付きソーセージ型のクネーユ、フォンデュで煮た蝸牛とマツシユルームのパイ、スパゲツティー・アラコンドレ、蜂蜜、泡立てたクリーム、レモン、海老、ビーフ・シチュー、ポークのカツ、刻んだキャベツ、オムライス、生卵、牡蛎、中国のヤムチャ、アイスクリーム、生の人参、おそば、鴨のあんうどん、おしるこ、天ぷらそば、スッポン、蒙古風マトンの焼き肉、桃、チーズ、パン、中国のマンドリン・パンケーキ、焼き飯、猪、そして山芋。国境も、部族も越えた食べ物の陳列だ。

飲み物だって、ワイン (コルドン・シャレマーニユ、シャトー・ピンシヨン・ラランデ) も、ビール (ハイネカン) も、ブレンドの酒も、母親の乳もある。職業も、サラリーマン、重役、マナー学校の先生、ウェイター、ウェイトレス、やくざ、海女、歯医者、看護婦、浮浪者、もと医者、食料品店の持ち主、泥棒、警察、工事人、二号さん、お抱えの運転手といった顔揃い。

『タンポポ』の人間関係

「お葬式」の人々の人間関係があつさりしているのに対し、「タンポポ」のほうは、もつとさつぱりしている。図で見ると、太い線がタンポポ、細い線が五郎で、破線がやくざの物語である。箱で囲まれた人々には、タンポポが直接会っており、実際に一緒に何かしている。その数は、全体の半数ぐらい。点線はお互いに知らぬまま通り過ぎる人びとの偶発的エピソードを時間的に順序づけている。例えば、齒が痛い男は、海女の背景を通り抜ける電車に乗っていて、男も海女もお互いの姿を全然見えていない。やくざは、浮浪者がタンポポの「先生」に「仰げば尊し」を歌っているのをホテルの窓から見るが、それが何のためか知らないし、知ろうともしない。先生にとつて、やくざは見たことも聞いたこともない、要するに存在しない人だ。ホテルには、会社員も、マナー学校の先生も、やくざもいるが、各人どの人にも会っていない。すぐ外では、タンポポが運動をしたり、会社員とすれちがつたり、浮浪者と会つたりしているが、ホテルとの関係はというと、地理的偶然以外の何ものでもない。息子が浮浪者とホテルの台所に忍び込むが、警備員すら彼らの姿を見ていない。クレイグ・オーエンズ (Craig Owens) の言葉で言うなら、ポストモダンの複合社会は「各人を他人の中の異人にしてしまう——全員を面識で繋ぐことがなく、全体の中の個に縮小してしまふ」(Owens, p.58)。さらにリオタードの定義を借りれば、この中の「個の価値は小さいが、どの個も肉体的に孤立した離れ小島ではない」(Lyotard, 1984, p. 15) ということになる。要するに差異が併存しているわけだ。

CHART I: TAMPOPO



目的を持たない物語

タンポポ自身を見ても、彼女は不朽のヒロインでも何でもない。第一この映画は、タンポポが始まってタンポポで終わるのではなく、やくざが始まって誰か知らない母親が公園で赤ん坊に乳を含ませている場面で終わる。次から次へと出てくるエピソードは、タンポポの存在意義を中心から外へはじき出そうとする。ひよつとして、この映画はやくざが劇場で見ている映画の中の出来事かも知れない。と言うのは、画面を隔てて観客が向かい合つて座るのはタンポポではなく、最初に出てくるやくざだからだ。「あつ、映画始まるらしいよ」というやくざの声で五郎がおもむろにトラックで画面に乗り付け、次にタンポポが出てくる。タンポポのこの映画における存在価値は、どこにでもある雑草タンポポのようなものだ。ポストモダン思考は、中核となろうとする要素を否応無しにはね返して、より大きい全体網の一部に碎いてしまう。だから、タンポポの完全なラーメンを求める冒険旅行は、ラーメンの上に浮かぶ焼き豚のようなもので、貴重なことに変わりはないが、ラーメンの代わりはできない。ジェームソンが言うとおり、「ポストモダンでは物語がその役割とか偉大なヒーローとか、大危機とか、大きな目的とかを持たない」(Jameson, 1984, p. xxiv)。

そして、ファビュラのついでにポストモダンの物語は、階層意識も頭ごなしにしてしまう。「タンポポ」では、一団の会社員がその役を演じる。若い抱持ちが上司にこづかれたり、蹴られたりしながらお偉方の後を追う。この六人組の中でフランス語を読めるのは二人、内、フラ

ンス料理に精通しているのは鮑持ちだけ。他の者は、皆わからないから、前の人に倣って同じものをオーダーする。鮑持ちだけがリングとくるみのサラダ、キャビアソース付きソーセージ型のクネエ、フォンデュで煮た蝸牛とマッシュルームのパイ、そしてワインとしてコルドン・シャレマーニユにありつく。こうして平役の鮑持ちが独自の知識と教育で重役をやつつけるわけだ。リオタードの「言語文化は、支配者にも奴隷にも、その地位を独占させない」という言葉はこういうことを指すのだろう (Lyotard, 1984: 15)。

既成概念を排した複数のカテゴリー

この下剋上の煩雑さは、ポストモダン・フェミニストの性 (gender) に対する態度に似ている。つまり、都合に合わせて複数のカテゴリーを起用し、一見便利そうに見える既成概念に頼らない。男女に格差を付けない。タンポポ、海女、食べ物を押搾するのが好きなおばさん、金持ちの二号さん、乳を飲ませる母親、のいずれもが、個として確立しており、五郎、やくざ、ピスケン、昌平等の男と同じぐらい印象深い。そしてとりわけ重要なのは、この映画のテーマ、料理たるものが、昔から女性の仕事であると同時に男性の職業でもあることだ。「タンポポ」は、女性の作業が男性の助けを得て男性に負けない職業になる過程を描く。五郎が殴り合いをしたり、交渉したりしている間に、タンポポが料理の腕を磨く。

階層意識とともに主体と対象の対置関係も除かれる。この映画では、主体がそのまま対象の位置にある。劇場に入ってくるやくざがいい例だ。彼は、我々を見て、「ほう、そつちも映画

館なのね？」と訊く。こうして、やくざと我々は互いに主体として見て、対象として見られる関係にあることに気づく。この両側から見る映画が一体誰についての映画なのか、やくざについてか、我々についてか、よくわからないうちに五郎やタンポポが登場し、ついでにこの映画を見ているはずのやくざまで出てきてしまう。一体、誰が主体で、誰が対象なのかかったものではない。

輪廻する時間

次に時間という概念に焦点を合わせてみよう。「タンポポ」の時間は梅原の輪廻哲学のように円く巡回している。全体としてのフアビュラはやくざの登場が始まって、彼の死でほぼ終結する。図にみるように、フアビュラの始めと終わりが円を描く。最初に登場するやくざと最後に出てくる同人物とは、二つの意味で結ばれている。一つはフアビュラの始めと終わりの要因として、もう一つは彼の人生観に関して。初めに劇場で彼は「人間つてさ、死ぬ間際にさ、短い映画みたいなのを見るっていうじゃない……その映画、オレ楽しみなんだよな」と語り、彼自身がその夢を見る時は絶対邪魔されたくないと言う。こういう意味ありげな発言をしたからには自分でそれを演じてみなければならぬし、実際に人に射たれて夢のような話をしながら死んでゆく。死ぬ時も、前に自分で言つたように、邪魔されずに死ななければならぬ。つまり、映画は彼を置きざりにして他の話へ移っていく……。タンポポの新しいレストランの話、五郎が帰らぬ旅に行ってしまう話、そして赤ん坊を育む名もない母親の話……。生命

はやくぎの死に関係なく続くわけだ。やくぎの人生が一つのファビュラとしての輪廻を全うしようとする所から新しい生命のファビュラが生まれる。ほかにも、例えば東京のエアプレーン・ショット（飛行機から撮った画像 airplane shot）も輪廻思想流布に一役をかう。最初のは、五郎の助手ガンが読んでいるラーメンの本の初めに出てくる東京の朝の空。物語の初めにふさわしい朝だ。二番目のは、タンポポが三つ目のラーメン屋を研究した後の日中の東京……タンポポはまだ休む余裕がなく、努力を続けなければならないことを意味する。第三番目は夜景で、タンポポが五郎、ピスケン、ガン、「先生」から最初のテストを受ける前、痩せた母親が三人の子供のために焼き飯を作って死んだ後である。最後のも夜景で、タンポポが二番目のテストをパスすると、彼女と五郎が最初に見学したラーメン屋が客離れして職人が居眠りをしている場面の間にある。この四つの風景は、朝から夜へ、初めから終わりへと移るわけだが、特に後の二つの夜景は、死／終わりの後に新しい生活が誕生することを約束しているようだ。

これらの節や循環経路は厳密な因果関係で繋がっているのではなく、点線で示されているような余談も含んでいる。だが、この余談さえも、いろいろな人々がひしめき合つて生活をしているという実感を与え、それなりに全体と個の相互関係を想像させる。個は総体の中の小宇宙だ。こういう個の集積が全体像を形どる。個同士にも何らかの関係があつて、いくつかの関係が合わさつて全体の性格づけをする。浮浪者がホテルの台所に忍び込んだかと思うと、熊田亀吉が詐欺師の財布を盗んでいる……ということは、社会の陽の裏には陰もあるということだろう。ホテルへ忍び込む浮浪者とパンや果物やチーズをぎゅつと握るのが好きなおばさんは、パ

ントマイムのような軽い足取りで、調子よく動き回る……ということは、犯罪にも軽いものと悪質なものがあるということか。

相互関係といえば、「タンポポ」は、食欲と性欲が似かよった本能からなっていることも示唆する。これもやくざとその情婦が演じる。二人は体と食糧と一緒に楽しむ。そして、やくざは最も官能的な食べ物の味わい方と体の使い方を同時に実現する。三島由紀夫の「奔馬」に出てくる鮎が、切腹しながら完璧な日昇を見るように、伊丹のやくざも、死にながら最高の食べ物の話をする。もつと平凡なレベルでも、死にかかった母親が子供と夫のために命を振り絞って作る焼き飯が感無量の食べ物として描かれている。なるほど、食べ物は人間のエクスタシーと関係がある。

（つづく。次号は「マルサの女」
（コルビー大学教壇）

新卒社員を募集します

「あなた」の版元、BOCで、九三、九四年度卒女性を募集中です。

千字以内の自己紹介文と、B5一枚に「あなたがしたいこと」「特技」を書いて八月末日までに下記にお送りください。

〒160 東京都新宿区新宿一・九・四・三〇三 BOC R係

ランドマーク
「道しるべ」ブックス 1

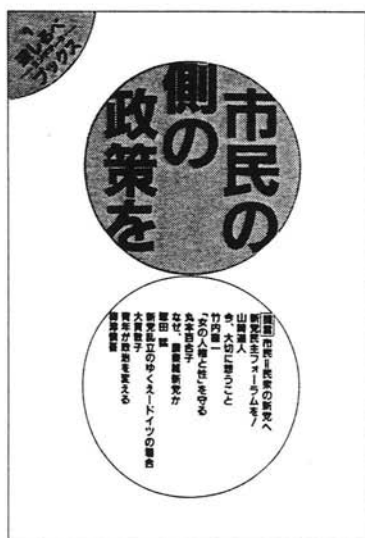
第一弾

市民の側の政策を

時々刻々の歴史的変動に機敏に対応し、新鮮な構想を、広く世間に提供する、「道しるべ」シリーズ」創刊！

環境・自治・共生・人権・非武装平和の五つの合言葉を発して、オルタナティブな社会と生活を求める「市民」民衆の側からの提案と構想へ道しるべ委員会が責任編集。

編集人——芦沢宏生 いいだもも
生田あい 岩淵達治 斎藤千代
三宮克己 丹野清秋 降旗節雄
本尾良



定価 700円 (680+税20円)

「道しるべ」構想委員会
〒113 東京都文京区本郷2-3-10
お茶の水ビル302
TEL・FAX 03-3812-9612

BOC出版部
〒160 東京都新宿区新宿1-9-4-303
TEL 03-3354-3941
FAX 03-3354-9014

あいら試写室

妻はフリピーナ

外三笠家(部分)



タイトルを聞いた時、あ、またじゃぶきさんか、と、心が重かった。が、違った。画面に出てくる「妻」は、たしかにじゃぶきさんらしいのだが、日本の男に搾取されるあわれなフリピーナでは断じてない。個性的で、主体的で、生き生きしているのは、いつも妻のほう。心やさしい日本の男が手玉にとられる映画、とも言える。

何となくウタツのあがらない男が、三人のフリピーナに振られたあと、やっとフリピーナと結婚できることになった。愛の結晶がまもなく誕生するというきわどい時期に、男はフリピンに急いで、式をあげる。日本側からの出席は、未婚の妹一人だけ。母は、まアまア理解してくれたが、父は激怒して義絶状態。妹も、「金持ち日本人」をあてこんだ結婚ではないかと疑心暗鬼。兄嫁がフリピーナでは自分の結

婚にも障る、という不安もある。が、当のフリピーナとその家族の温かさ、に包まれて、兄の唯一の支持者になる。産み終えた子どもを実母に預けて妻は単身上京、またバーで働き始める。夜警で働く夫の月収は一七万、妻テレサは二二万。妻の収入は全額フリピンに送られる。

「わたし、日本人大きらい。おじいさん日本人に殺された」と言われると、夫はうつむくほかない。

一年後、実母が孫娘と上京する。テレサは本当の母なのに娘はなつかない。テレサも実の娘を愛さない。娘と一緒に暮らしたのでは夜の商売ができない、またフリピンに帰すという。

親子三人で暮らしたい夫は、ひかえめに懇願する。

「いつまで送金しなければならぬの」

「一生よ」——妻の言葉には妥協の余地がない。哀願のまなざしの夫に妻は追い打ちをかける。

「あんた、日本人の女と結婚しなさいよ。いいわヨ。オカエリナサイ、サアオフロ、サアオサケ……。文句は何ひとつ言わないし。私はでも、あんなのイヤ」

主役の男優が監督で、フィリピーナは彼の本当の妻。きわどい夫婦の生活も含めて、ありのままの日常をすべてカメラに収めている。早稲田の社会学部を出て、今村昌平さんの日本映画学校に入り直した主人公の卒業制作映画が前半の四十分。第二回国際映画祭のドキュメンタリー部門賞を受賞、そのお金で七人の学友がカメラや照明を受け持ち後半の一時間をつくったら、九三年度日本映画監督賞を受賞、七月十六日から東京のシネマアルゴ新宿で

一般公開することになったという。

ケレンみがない、虚飾がない、徹底に才気がない。そこが得がたい。

「映画がおもしろいって？ 私がおもしろいからよ」と、テレサさんは我慢したというが、その妻のおもしろさをここまで引き出した夫には、無条件に脱帽したくなる。

日本でも海外各地でも、悪名高い日本男子だが、こんな男もいた、と、ちよつとホツとする。

慰安婦問題、戦争犯罪etc気持がクラークなつてるとき、絶対おすすめ。カメラワークも、音も、日が経つにつれてどんどん上手になっていく、それを見るのもタノシミ。

入場料千七百円。あなたのでて名を書いた封筒に千二百円分の切手を入れて事務局まで送って下されば、「あとら特価」で切符をお送りします。(千)

7月16日よりロードショー

当日料金1700円のところあこら特価1200円で前売中！

シネマアルゴ新宿

新宿南口・甲州街道沿い武蔵野通りゲームワールドB1

TEL. 03-3350-6695

●連日 11:00/1:00/3:00/5:00/7:00

ペルーの女は立ち上がったⅡ

序章 2

キヤロル アンドレアス
訳 サンディ サカモト

ペルー旅行中、私は農民組合指導者とともに、アブリマツクの先住民を訪問し、そこで数週間過ごした。この中央山脈地方の人々は、飢餓が何年間も続いたので、救援食糧を特別にもらえる受給資格をもっていた。しかし、このような食物は政府がゲリラと戦っている地方で、飢餓など起こっていない場所に輸送されていたという報告がある。私の友人の仕事は、特に辺りな所に住んでいる人々や、豪雨や引き続いて起こる飢餓で苦しんでいる人々に、緊急援助が用意されているかどうかを調査することであつた。貧困と政治的緊張で、友人とその家族は健康をひどく害していた。そのため彼女が三九歳になるまでに三人の子どもはすでに死んでいた。地方に住んでいた頃、友人と私はさまざまな苦勞を重ねた。男たちのいない山奥のコミュニティに住んでいた女性たちと直接連絡を取るために、十二時間もかかる急斜面の山登りをする

ことはできなかった。しかし、幸運なことに、道路建設事業に参加するために、山から降りてきた女性たちと話をするチャンスに恵まれた。女たちは、とうもろこしの生産がうまくいかなかったり、家畜が原因不明の病気で死んだりしても、山から降りてくるのが、彼女たちにとって良いことだとは思わないと語った。それでもやはり、彼女たちは他の地域の女たちと連絡をとり、世界についての知識を得るのに必死のように見えた。

地方からリマに戻り、私は新しくできた先住民運動で活動している古い友人と過ごす時を持つことができた。その時、数日間にわたる大会の間、私は赤ん坊の世話をすることを約束した。私たちは彼女が定期的に会場から抜け出し、赤ん坊にミルクをやり、夜と一緒に過ごすものと思っていた。しかし、町はストや反政府抗議のため非常事態となり、会議が始まった後は誰も出入りすることはできなかった。赤ん坊は無事だったが、私と彼女はお互いに連絡がとれないために、不安になってきた。その大会で、友人は組織の理事会のメンバーに選ばれた。町にきて、大会に参加するのに大変苦労したけれども、何よりも多くの女性が大会に参加したことが、私には非常に嬉しかった。しかし、私も彼女も女としての経験から、女性が先住民運動に十分に参加するためには、保育の問題を解決しなくてはならないことを知っていた。事実、家事労働者として働いていた友人は、政治活動するために特権を利用して、子どもをメイドに頼んで出かける中産階級のフェミニストたちを批判した。勿論、彼女にはこのような選択の余地はなかったし、彼女の仲間たちは根本的にそれに反対した。

ペルーに住み、ペルー女性と一緒に働いている間、私は常に部外者だった。聞かれない限



り、発言は減多にしなかったし、テープレコーダーは簡単には使わなかった。親友の中には、私が、この点において用心深すぎると思った人もいるが、私の経験から、このくらい用心深くしないわけにはいかなかった。ある老いた男が、私に直接言った。「お前は宣教師かCIAに違いない。さもないければこんな所で何をしているんだね？」幸いなことに、私は農民について書いた記事を持ち合わせていた。彼は座って、村人の前でそれを大声で読んだ。その中には、私を何年も前から知っている者もいた。彼らは、自分たちについて何を書いたか興味深そうに聞いていた。私はその老人から信頼を勝ち取らなくてはならなかった。幸運なことに、その老人と同じように、村人もまた私に役に立つ批評をしてくれた。私は、聞いている人々がいて本当によかったと思った。

一度だけ、女性のために自分から進んで、直接仲裁に入ったことがある。ジャングルのヤネシヤインディオの会議中、私は食事の用意を手伝っていた。会議に参加していない男たちは、私たちが料理するのをただ見ながら時々命令したりした。ヤネシヤの女性は、それをほとんど無視していたが、女性たちが何か頼んだときは、男たちはそれに応えようとしなかった。突然、大きなスープ鍋が倒れた。男は女たちに向かってわめきちらし、女たちを間抜け者と呼び始めた。私は半分ジョークで、「あんたは何もしないで見ていたんだから、スープがこぼれそうだと言ってくれたらよかったのよ」と彼にいった。「まるで主人かボスみたいになるまつている」と私が彼を非難してる時に、討論が始まった。彼は「ムチを持つていないのだから主人になれるはずがない」と自分自身を弁護した。首都からきた視察団の一人に、私が出来事を詳しく説明したら、彼はでしやばりだと言つて私を非難したが、料理をしていた女たちは、私の

したことを喜んでくれ、とどまるように私に勧めた。あとになって、男が部外者である私に（自分を良く見せようとして）印象づけようとして女たちにわめきちらしたのだということがわかったが、女たちは、私の断固たる態度をみて喜んだ。

ごく最近ペルーを訪問した時に、私はペルー内の他の地域で起こっている事を女たちに話した。その時に、人々が私に感謝してくれたので、報われたような気がした。とにかく私が個人的な方法で成し遂げようとしたことは、物質的、個人的、政治的問題を持つている女性活動家を支援することだった。最初の頃はこのような事はほとんどできなかった。というのは女性がどのような状況に置かれていたのか気がついていなかったからだ。一九七〇年代半ば、組合やコミュニティ組織の中で力を勝ちとろうとしている女たちを励ましたりすると、男たちはまるで私が悪い事をしたかのように非難した。男たちは、私が女と男を敵対させて、人々を分裂させようとしている部外者だと女たちに言った。一九八〇年、ペルーを訪問した時、女性はそのような考えに脅されなかったし、だからといって男たちに敵対していたわけでもなかった。

地方の女性は、私と考えを分かち合うことにとっても熱心だったし、強制されることなく私の考えを熱心に聞いてくれた。以前には私に組織を管理してくれと頼むケースも時々あったが、彼女たちはすでに組織され、団結を求めている。普通私ができることといえば、ペルーの他の地域の女性活動家から学んだことを提供することだった。私が有利だったのは、彼女たちが、毎日のすさまじい闘争に没頭している間、自由に旅をして学べることだった。彼女たちは多くの女性たちの絶望的な状況を打破できる方法を探していた。また彼女たちは、「良い行い」（政

府に従順であること）をすれば、権力の手で「より良い日」（生活の保障）が与えられると考え、それを単純に望む人々に対応する方法を探していた。私が、すでに組織化に成功している女性たちと連絡が取れるように援助したことで、彼女たちの運動に力と希望が与えられた。

学ぶということは逆境、敵意、そして友人同士の思想の交換からでもできる。ペルーの女性闘争を理解する上で貴重な経験のひとつは、私の元の夫、ラウールの祖母がペルーに戻る途中でしてくれた歓迎であつた。夫の祖母であるママ フアナは、ラウールと私をコミュニティの土地に住めるようにするために、ワンカ インディオコミュニティに所属できるようにしてくれた。しかしその後、一九七六年、私たちは別居した。一九八一年、ラウールの母と私はリマに帰る途中、祖母の家で数日過ごしたいと思つて祖母のママ フアナの家に立ちよつた。ママ フアナは私たちに向かつて叫んだ。大声で泣きながら、家のドア越しに彼女の娘に言つた。「私のかわいい男の子を苦しめたカローラと一緒に、ここから出ておゆき！」

ママ フアナは呪術医で、孫のラウールを育てあげた。ラウールと私は米国に旅に出る前に、ママ フアナのアドバイスでもある試験結婚（結婚する前に長期間同棲し、うまくいった時のみ結婚するが、日本の「足入れ婚」と違つて、女性にも選択権がある）をするというインディアオの伝統を守らずに結婚した。彼女は、私たちが常に喧嘩などして衝突していたということを知っていたし、私たちの結婚は伝統に違反していることも知っていた。しかし、結婚したあとは、彼女も私たちを支援してくれた。年をとつてからは世捨て人のようになっていたが、ラ



ウールと私がマンタロ溪谷のコミュニティに帰った時、彼女は部外者に心を開き始めた。しかし、私がペルーを離れてすぐ、彼女は一週間警察に拘留され、私たちの政治的活動について話すよう強要された。



その後は、彼女は以前よりも隠遁した生活をするようになり、不満解消のため呪術を再びはじめた。その後、私は彼と別れ、ママ・フアナは彼の精神的ショックを分かち合うことになった。こんなわけで、ママ・フアナの娘と私が彼女を訪問した時、彼女は非常な精神的動揺を見せた。そのため、私は彼女に謙虚な態度で接するように努力した。また私は女性間で連帯しあいたいと願ったが、それにも限界があるのだということに気づいた。また、ママ・フアナの怒りは、完全に重荷や責任を負わずに、コミュニケーションの恩恵だけをこうむるという選択のできる外国人に対するインディオ女性の怒りでもあったということを私は理解することができた。

インディオの人々が私に対して親しもうにするのは、私が情熱をもつて努力した結果であつて、けつして一般的な外国人への「信用」を意味するものではない。北米人にとつて無条件の信用などというものは、ペルーでとうてい期待できるものではない。また私は本を書くこととして、自動的に尊敬と協力を得られるわけでもない。多くのペルー人にとつて印刷された言葉は、必ずしも運動を高めたりするものではないのだ。人々が私の仕事を理解し、納得してくれたと思つても、私に援助をしてくれる十分な時間がある人は少なく、ほんのひと時の時間もムダにはできないので、彼女らに会うために何度も戻らなければならなかった。

このような理由のため、私を常に援助し励ましてくれたペルーの友達に、ここで公に、お礼を言いたいと思う。不幸なことに、彼女たちにとつては名前を出さない方がいいので、名前はあえて書かないことにする。私たちが受けついできたのは不親切な世界——それを私たちは変えようとしているのだ。

ペルー外で、この本のまとめや進展を援助してくれた人々は、ジャナエベレット、ペギーグリーンソン、フロレンスバップ、グローリアエスコバー、アイリーンシルバーブラット、バーバラミルメン、ウルバシブタリア、イネススバンチエロと、ロバートモルテノである。最終的なものができる前にペルーで読まれ、批評できるように、リディアフレイルはスペイン語に翻訳してくれた。出版社もまだ決まる前のことで、彼女に報酬を出せないとわかっていながら翻訳してくれた。彼女の興味と援助はこのプロジェクトを成功させるのに大きな力になった。

故意に個人的手法で書いたので、参考資料については、必ずしもどの研究資料が私の役に立ったかはつきり明記しなかった。それで、後記を注意深く読者に見てもらいたいと思う。つい最近まで、ペルーの女性についてほとんど何も出版されてこなかったが、多くの資料の存在自体、女性が変わりはじめた証拠であると言えるだろう。そのほとんどが、私が直接収集した資料で、ペルーや他の場所の図書館で捜せるものではない。収集意欲を高めるために、そして草の根レベルで情報を広げている活動家の努力を広く知らせるために、これらを載せた。

本当は、もつとペルーについて学び、情報や写真を集めてからこの本を出版したかった。しかし、歴史を書くということは多くの人々の努力によつて生まれるものなので、この本が完璧なものでもなくても、一日も早く読者に届けるほうがよいと決断した。この貴重な「女のたたかい」の記録が、いろいろな国、いろいろな地域の、同じ様な目的を持った人々の役に立つことを願っている。

あごらめいと

はんなりと 人を包みこむ

澤田和子さん

ずっと以前のことが、ある人に、「あなたは大阪の人みたい」と言われてギョツとしたことがある。東京の人間にとつては、大阪人イコール「もうかりまつか」のイメージ……。うろたえていると、「これ、最高のホメことばよ」と注を頂いた。釈然としなかったが、この頃になつて、「大阪の人」の良さが、しみじみとわかる。

心の奥底のサービス精神、やさしさ。手間ひま惜しまない心配り。そして表と裏の差がない。

澤田和子さんとつきあえばつきあうほど、むかし聞いた「大阪の人」ということが納得できる。

澤田さんが「あごら」に関わるようになったのは、八二年発行の「女と戦争」が動機だという。当時、ヘタ陽ヶ丘女性史グループで女性史を勉強中の澤田さん、「女と戦争」についての

リポート作成をしていて、資料を探しに訪れた紀伊國屋書店で「あごら」の「女と戦争」にめぐり会った。以来十三年のおつきあい。

「読むだけで少しもお役にたつていない」が、澤田さんの口ぐせだが、一冊出ることには細かな感想を寄せてくださる。「これは必要な情報」と思うと何十冊も買い込んで配り歩いてくださる。損害保険の代理店を開きながら、出版物を出したり、平和運動を続けたり、いつもマメに立ち働く澤田さんの人脈ネットワークは広い。

「私は楽天家、まあボチボチやつてます」を看板にしている澤田さんだが、義侠心のかたまり。義を見てせざるは男なきなり。逃げたことはない。だから、いつも忙しい。夫婦でありながら、夫だけの配転はおかしいと、朝日火災の転勤問題の応援団に。ついに勝

訴した粘り腰もすこかった。

政治の問題にも、いつでも鋭いアンテナを張っているが、「得意先では政治の話は決してしない。政経分離」というバランス感覚の持ち主でもある。思わぬところで人を傷つけては……という、大阪人らしい心配りだろう。

十人集まれば考え方も十色、というのも、彼女の哲学になっっているらしい。ある女性を私に紹介してくださった時のせりふ——「一緒に女性史をやった仲間やけど、私たちのへ夕陽ヶ丘女性史グループ」にはあきたりなくて出



ていきはったほどのお人よ」には恐れ入った。グループを去る人はとかく白眼視しがちだが、「自分のところでは満たされない人」と評価する。ふところの深さはナミの人では真似できない。三十年近く働き続けたパキパキのキヤリアウーマン。一緒に仕事すると、その小気味よい仕事さばきに、いつも感心してしまうが、第一印象は、はんなりとやわらか。船場のご寮はんとはこういう方かな、と思ったりする。ご家庭の話はほとんど耳にしたことがないが、近所でも評判の奥さんであり、お母さんでもあるらしい。

〈あこら大阪〉は、責任者が何度か変わって、今は吉田悠子さん。引つ込みがちの彼女を蔭ながら支えつつ、今度の「女住職……」の号は、むしろ先頭に立つてまとめてくださった。

最初に蓮月尼の原稿をお送りしたと

き、「正直言つて、わたし、こんな苦手です」と、電話の向こうで溜息をついておられた。ご母堂の仏事をめぐるしんどき以来、仏教には、できるだけ近づかないことにしている……と。蓮月尼式の、直線型のたたかいかも彼女の体質とはなじまなかったのだろう。

それでも、何度も何度も原稿を読み直し、大阪在住のへあこらメイトたちにはコピーを送り、連絡をとり、吹田市での講演会にまでこぎつけた。

近頃、ひと頃の勢いを失ったへあこら大阪の輪をなんとか守つていこうという、大阪女らしい心づかいだったのでは、と思う。

どこのグループでも、ナンバー2が一番大事だが、この得がたいナンバー2を持つへあこら大阪に、また花が咲く日も、遠くはあるまい。

(斎藤千代)

看護婦



と



(14)

小西洋子さん (2)

増田れい子

小西さんは、国立東京第二病院救命救急センターの婦長さん。十九人の若い看護婦さんのリーダーとして運びこまれてくる「瀬戸際」のいのちを守って日夜奮闘する。働きざかりの四十三歳。脱サラしてあたらしい仕事を模索中の夫（四四）長女（九つ）長男（七つ）と、もと医師だった義父（七六）、もと東大病院の看護婦だった義母（七一）との暮らし。

「看護婦には向いてないかも知れないけれど、仕事をするのが大好き。人間にかかわる仕事が好き」という小西さんである。

きょうは、なぜこの道を行くことになったのかを中心に語っていただく。加えて、問題になっている看護婦不足。地位向上に関して日ごろの思いを話していただく。

*

「生まれは岩手県。小沢一郎さんの地盤の江刺なんです。代々農家で、両親は米作やつてます。きょうだいは兄と私の二人。兄は岩手の大学を出て県の職員、公務員です。一九六〇年代に岩手の農家でこどもふたりを上为学校に入れるというのは大変なことでしたが、両親とも、もともと農村を出てやりたいことのあつたひとたち。夢をこどもに託したかったのでしょう。進学校の水沢高校にまず入りました。両親はどうも私

たちを教師にしたかったようです」

この社会でもっとも安定した職業は何か。教師だろうという常識はいまも生きているが、小西さんは、教師にだけはなりたくなかった。

こどもから好かれていない自分を知っていたからだ。しかし、一生続けられる仕事欲しかった。一方、兄が大学在学中で、家の経済状況はきびしかった。おカネがなくても進める上の学校といったら何か。看護学校だった。

友だちに準看の資格をとったひとがいた。それもヒントだったようだ。

ところが、学校でも看護学校の情報をひとつも持っていなかった。

「国立東京第一病院というところに高等看護学校があると聞きつけて、受けてみたんです。試験は簡単でした。あ、その年は丁度東大紛争の直後で東大入試がなかった年だったんです。そういうこともあってか、優秀なひとたちが殺到しましたね。看護学校に入っても目ざすのは教員、つまり三年やつたのち、保健婦の資格をとるため一年勉強して、養護教員になるというコースですね。

私も保健婦そして助産婦の資格までとりましたが、好きでとびこんだ分野というわけではないので、違和感がつきまといつて離れないんです。

もう一度、大学へ入りなおして自分の道を探したかった。あとになって、医学の道を探していたのではなかったかと思いましたが当時はよくわからなかった。ともかく看護のほかに行くべき道がありそうだとばかり……。

何しろ、人と話をするのが不得意で……でも人と接触しないでやれる仕事ってこの世にあるでしょうか。一年たつたとき、意識革命して自分を変えました。ともかくこの道を行ってみよう、不向きは不向きでいいじゃないか、不向きな分野に挑んでみようじゃないか。そう思うようになりました。

いまでも、ときどきそういう意識革命をやっています。実は救命救急センターに移ったところも、何だかこれは自分の仕事と思えなくて、ウツ状態で落ちこんでいたんですね。やりたいことがやれそうもない。後ろ向きになつてしまふんですね。まわりが見かねて、あなたらしくない、あの元氣はどうしたのよという。それで心機一転、私はやはりいつも元氣印で、困難に立ち向かつてこそ私なのだと自分自身を前向きに変えて、救命救急センターの看護チームの大幅なつくりかえを一気にやつてのけたんです。

*

ふり返つて見ると、そういう山場が何回かあります。看護学校に入つて一年間は悩んで、それから覚悟を決めました。

六人一部屋の寮ぐらしでしたが、カーテンで仕切つた暮らしの場がありました。よく議論しましたね。看護学はあるのかないのかという議論。あるのかないのか、わからないから議論していた。いまのひとたち、そういう議論はまともにしないようですね。

家からの送金は当時で一万円。他に奨学金をもらつてましたから足りました。三年終わったあと、保健婦と助産婦の資格のとれる一年のコースをとりました。これはハードでした。講義だけではなく実習があります。実習の日は一番電車で保健所に入つて、こどもの検診から在宅訪問まで実地にやるわけです。この一年間は眠くて眠くて、いま思い出しても身がすくみます。

一年を何とか切り抜けて、私は晴れて東京都芝保健所に勤務することになりました」

ここで三年を過ごす。その間に小西さんは精神衛生相談員の免許をとった。

「あれこれの免許をとるというのは、つまりほんとうに自分のしたい仕事をもひとつ確実につかめていないからなんです。迷っていることの証拠なんです」

*

小西さんは、保健所で仕事をしながら落ち着けなかった。やはり病人のいる病院で働かなくては現実が見えない。病院へ戻ろう。

国立西埼玉中央病院に移った。しかし……。

「患者さんと向きあつたとたん、自信喪失です。前に、人と話すのが苦手といいましたね。でも、看護という仕事はまさに言葉と態度で行うものなんですね。私は自信がありませんでした。真意が伝わつたのかどうかわからなくて悩むというか、言葉の使いかたひとつで患者は納得するんですが、私にはできないんです。年期をつんだ助産婦さんがいて、その人と私は同じ言葉を使っているのに患者は私には納得を示さない。同じ言葉を使つていても伝わらないんですね、私のほは。」

これはものすごいショックでした。これはもうダメだと思いました。二年半、何とか耐えていましたが、限界が来ました。私はすつぱりと、この世界から身を引こう、やめようと思いました。私にはできない。この世界に私は不要だ。二度と再びここへは戻るまい」

白衣を脱いでしまった。二十七歳になつていた。

そうしてすすめられるままにヨーロッパへ三か月の旅に出た。悩みが過ぎたのだろう、すつかりやせてしまつていた。三か月の休暇。費用は親（養父）が出してくれた。（実は小西さんは二十三歳のとき養女に行つてゐる。もともとこの姓は小沢、養女になつて浦野、いまの小西の姓はその後結婚した夫の姓である）。養父は医師で、よくよく娘の様子が心配だつたのだろう。

「エジプト、ローマ、パリ、ギリシャ……とツアーの一員で旅したんですけど、ローマの宿で、ふと我に返つたんです。こんなぜいたくしていいのか。そんな身分か……と。よほど私、貧乏性に出来てるのねえ、ぜいたくといつたつて、大したことではなかつたのに、もう罪の意識というか身につかない。とんでもない、こんなところに何もしないで遊んでいいのか。働かなくっちゃ……。親はいまも働いて生きてるの

に、私が遊んでいいはずない。もう一度、ほんとに看護婦が自分に合っているのかいないのか、チャレンジして見ようじゃないか。それで、ダメなら引つ込む。もう一度ゼロから出発してみよう」

ローマの宿の一夜がなかったらいまの私はなかったかも知れない……と小西さんは言葉をうるませた。ローマ。だからもつとも忘れ難いまち、心のまち。いまでも一番行つてみたいまちはローマだという。

(この項続く)

「連続講座」'95世界女性会議——北京会議への道(全八回)

7月20日(水) 普通の女が参加すること

——メキシコ・コペンハーゲン・ナイロビ会議に参加して——

斎藤 千代

8月26日(金) 変わる流れ、変わるキーワード

——知っておきたい基礎用語——

深尾 凱子

9月30日(金) 激動するアジアと女性たち

——日本を見る目——

松井やより

10月28日(金) 北京会議の特性と準備状況

中国婦女連合会国際連絡部副部长

張 静

●東京・虎ノ門・国立教育会館会議室

03-3580-1251

(地下鉄銀座線虎ノ門下車スグ)

●毎回 午後6時～午後8時30分

●1回 1,500円

ずっと住みたいね 吹田

私の街の輝く女性たち！

じよねつと・すいた編集部編

吹田市立女性センターで女性問題セミナーを受講した1期生、〈あこら〉の小谷訓子さんたちが、「学習の場を提供だけでなく、出口も作ってほしい」と市に要望、同時に、自主グループ、〈へじよねつと・すいた〉を結成、地域の百人の女性をインタビュースて、きれいな本が出来上がった。

大都市では、隣に住んでいる人が誰か知らないことも多いくらい地縁が薄れているが、何かのきつかけで、アラこんなステキな人がいたの……と驚くことも多い。この本は、一人二ページ

ずつをあてて、そのステキな女性百人を紹介している。

切り絵の先生、ソフトボールの公式審判員、フオークダンス指導者、自然と健康な食事を広めている「野菜教室」の主宰者、共同子育てから発展した「お菓子の家」、リフォームで古い布に愛と命を吹き込む人、街の「花咲か、かあさん」等々、なんとも豊かなステキな人が続々登場……。わア、この人にも会いたい……この人にも……と思ってしまう。——これでは、「ずっと住みたいね 吹田」になるのも、無理もない。何より企画がすばらしい。登場するすべての人がすばらしい。つくり手もみんなすばらしい。

「ネットワークとは」、なんて講座

が時どき開かれるけれど、これこそはネットワーク。全国でこんな企画が広がったら、〈女性党〉よりもつとパワフルになるかも……。

編集後記の中からいくつか紹介しよう。

●「花はなぜ美しいか ひとすじの気持ちで咲いているからだ」という八木重吉の詩を思い出す作業でした。

百人のみなさん、ありがとう。

●「人は人の中で育つ」ということばを幾人の人から伺いましたが、私もインタビュースの中で、〈へじよねつと〉の中で、実に多くのことを学びました。

●インタビュースにワクワク！

ワープロにシクハク！

(A5版 215頁 一、〇〇〇円)

申込先は 〒565 吹田市新芦屋上

12-30 じよねつと・すいた編集部

☎06-876-7300 (ま)

第38回婦人の地位委員会から

日本国内委員会委員 有馬 真喜子

第38回国連婦人の地位委員会は、3月7日から18日までニューヨークの国連本部で開かれた。メンバー国45か国に加え、オブザーバー国の代表やNGOも多数参加した。ここでは討議のなかから「第4回世界婦人会議の準備」を中心に述べていきたい。

婦人の地位委員会は、第4回世界婦人会議の準備委員会と位置付けられており、これまでも大きな枠組みを決める作業などをしてきたのだが、世界会議を来年にひかえ、今年は内容の詳細を決めることに重点が置かれた。

今年の会合で議論の中心だったのは、第4回世界婦人会議の中心議題「行動綱領」の原案づくりの作業である。

1985年の第3回世界婦人会議では、「西暦2000年に向けての女性の地位向上のためのナイロビ将来戦略」がつくられ、この10年間で、世界の女性にとっての指針として大きな役割を果たしてきた。「ナイロビ将来戦略」は372項目という膨大なもので、世界の女性のあらゆる問題を網羅しているが、第4回の「行動綱領」は、ここに重要な課題を抽出し、そこに焦点を当てて解決の方向を探るものになろうということで見解の一致をみている。

「ナイロビ将来戦略」に比べるとずっと短く、簡潔で、戦略的で、実際の行動にすぐ役立つものになろうとも強調されている。今年の討議を通じて、全容がだんだん明らかになってきた。

まず、全体は6部構成で「使命の声明」「世界的枠組み」「重大問題領域」「重大問題領域から引き出された戦略目標および取るべき行動」「財政的整備」「行動綱領の実施および監視のための制度的整備」から成る。このうち討議の中心だったのは「重大問題領域」および「戦略目標および取るべき行動」で、領域については以下の10の領域が設定された。

A あらゆるレベルの権力と意思決定の分担における男女間の不平等。B あらゆるレベルにおける女性の地位向上を促進するための不十分な仕組み。C 国際的・国内的に認められたい女性の人権に関する認識および関与の欠如。D 女性への持続し、増大する貧困の重み。E 経済構造・政策の定義および生産過程自体への女性のアクセスおよび参加における不平等。F 教育、保健、雇用および関連サービス並びに

その他女性の能力を最大限に行使する手段へのアクセスにおける不平等。G 女性に対する暴力。H 武力またはその他の紛争の女性に対する影響。I 女性の社会への積極的な貢献を促進するためのマス・メディアの活用の不十分。J 天然資源の管理及び環境保護への女性の寄与の十分な認識および支援の欠如。

目標や行動についても各国やNGO

からさまざまな提案が出された。最終案は来年の婦人の地位委員会で決まる。

もう一つ述べておきたいのは、今年会合から婦人の地位委員会へのNGOの参加が大幅に拡大されたことである。経済社会理事会上に諮問的地位を持たないNGOも、申請し、承認されればオブザーバーとして会議に参加できる。現在120余りのNGOが参加を認められており、日本からも国際婦人年連絡会など4団体が承認された。

(国連婦人の地位委員会日本代表・
財団法人女性協会理事長)

NGO協議会議に出席して

— さあ、皆で北京へ行こう —

日本国内委員会委員 深尾 凱子

「変わりゆく世界の変りゆくフォーラム」(Changing Forums in a Changing World) — 来年9月、北京で開かれる世界婦人会議と並行して行われる民間女性会議「NGOフォーラム95」をどのように盛り上げるか。それを協議するため、3月3日、4日の2日間、ニューヨークの国連で行われたNGO協議会議のタイトルである。

1975年、メキシコシティで開かれた第1回世界婦人会議から早くも20年。そして第3回のナイロビ会議から10年ぶりの世界婦人会議だ。新聞記者として、過去3回、全ての世界会議取材した経験から、この20年間の世界の流れの変化を改めて増みしめた。

前夜の猛吹雪の影響で、国連ビルの回りは一面真っ白。深い雪が積もっていた。その中で開会した協議会議に参加したのは、世界各国からNGOグループの女性ら約1,000人。

最初のプログラムは、世界の概況説明と北京婦人会議との関係をテーマにしたシンポジウムだったが、そのパネリストの顔ぶれに、私ははっきりとこの20年の世界の流れの変化が表れていると思った。北京婦人会議事務局長のガートルード・モンセラ、NGOフォーラム95の議長・スバトラ・マスティット(タイの前婦人問題担当)、北京婦人会議中国組織委員会副主席・フォアン・シーツァオ(黄貞環)、そして男性であるフアン・ソマビア(チリの国連大使で、来年コペンハーゲンで開かれる世界社会開発サミット準

備委員会議長) — といった各氏である。前3回の世界婦人会議では、民間女性会議と政府間会議は、ややもすると対立した姿勢を示すことが多かった。しかし、北京会議ではかなり様子が変わりそうな気配である。

モンセラさんは「NGOが国連の様々な活動の中で、各国政府の政策作りの中で、大きな構成要素として活動することを期待する」とNGOの役割の重要性を強調すれば、NGOフォーラム議長のマスティットさんは「政府と民間グループの人たちがお互いにうまく利用し合うことが成功のカギだ。北京会議では私はミセス・モンセラとパートナーシップを組んで行動したい」と述べた。モンセラさんが挨拶の中で何度も「男性とパートナーシップ」を口にしたのも印象的だった。北京会議では、パートナーシップ、連帯、ネットワークなどがキーワードになりそうだった。そんな気がした。

フォアンさんによる中国の準備状況説明は流れるような中国語。「NGOフォーラム」の会場は北京労働者スポーツ・サービス・センター、13,000人収容のスタジアム、70の会議室、回りには約40軒のホテルがあり…と意欲満ちたであった。

協議会議の最終日、アメリカの前下院議員・ベラ・アブザグさんの音頭で唱った歌の歌詞は「私たち女性はカラフルな虹の色。さあ皆でペイジン(北京)へ行こう」だった。

(埼玉短期大学教授)



NEWSLETTER

創刊号
'94.5.15



編集・発行 第4回世界婦人会議日本国内委員会NGO部会

－第4回世界婦人会議に向けて－

縫田 暉子

（第4回世界婦人会議日本国内委員会NGO部会長）

○ 刊行にあたって

1995年9月に北京で開催される第4回世界婦人会議まで、1年4か月となりました。また、今年6月にジャカルタで開かれるESCAP地域準備会合は、もう目前です。

国連では、これらの国際会議が、単にそれとして独立してあるのではなく、世界の各地域、各国、そして各国内においても地方の隅々の人々が女性問題を考え、語り合い、女性問題解決に向けて動きだす、その大きな契機になるように、強く呼びかけています。

幸いにも、日本の女性団体を始め民間の関心は高く、北京に向けて様々な動きが始まっています。第4回世界婦人会議に向けて政府に設置された日本国内委員会には、このような民間の動きとの連携を図るためにNGO部会が置かれていますが、この度、年間4回程度の頻度で、このニュースレターを発行し、特にNGO等民間の方々に関心の深い事項を中心に情報を提供することといたしました。これが広く読まれ、北京会議に向け官民を挙げた女性問題解決への気運の醸成に役立つよう願ってやみません。

○ 第4回世界婦人会議日本国内委員会の動き

さて、創刊号でもありますので、ここで、このニュースレターの発行者であるNGO部会について御紹介しておきましょう。

政府・民間の両者の委員からなる日本国内委員会（委員長：総理）は、世界婦人会議の事務局長であるガートルード・モンゲラさんの来日に合わせ、昨年10月設置されました。12月16日に開かれた初回の国内委員会では、武村正義女性問題担当大臣が、女性問題解決に向けては、国連の取組と連携するとともに官民が一体となって取り組む必要がある旨強調されるとともに、北京で採択され

る行動綱領が世界の人々との熱い議論と合意の上、に創りだす21世紀の世界ビジョンとなるよう強い希望を表明されました。

NGO部会は、国内委員会の民間側委員34名をメンバーとして国内委員会内に設置され、今年5月に国連への提出が予定されている国別報告、いわゆるナショナル・ペーパーに盛り込む内容の議論等を行うほか、NGO部会主催で、女性団体など広く国民各層にオープンな形で、国別報告について意見を聞く会や6月のESCAP準備会合についての動き、さらには「開発と女性（WID）」についての日本の取組状況について情報を提供する会を開催するなどの活動を行ってまいりました。

○ 世界会議に向けたNGOの役割

世界婦人会議においては、政府間会合と並行してNGOフォーラムが開催される予定であり、国連も女性、人権、環境、人口といった課題の解決におけるNGOの役割には大きな期待を寄せています。日本のNGOが、北京に向けて、女性問題解決のための様々な活動を繰り広げていくために、私たちNGO部会としてもささやかな役割を担えるよう活動していきたいと考えています。

目次

- ・ 第4回世界婦人会議に向けて…………… 1
- ・ 第38回婦人の地位委員会から…………… 2
- ・ NGO協議会議に出席して…………… 2
- ・ モンゲラ事務局長メッセージ…………… 3
- ・ 世界婦人会議について…………… 3
- ・ NGOフォーラム '95…………… 4
- ・ Asia Pacific NGO WG …………… 4

NGOフォーラム '95はどこで企画されるか？

来年9月4日から15日まで北京で開かれる政府間会議である第4回世界婦人会議と平行して、NGOフォーラム '95が8月30日～9月8日、北京

労働者スポーツ・サービス・センターで開催される。

その事務所は、ニューヨークのUNプラザの777番地にあるチャーチ・

センターの8階にある。その組織は下図のとおり。



【 NGO企画委員会 】

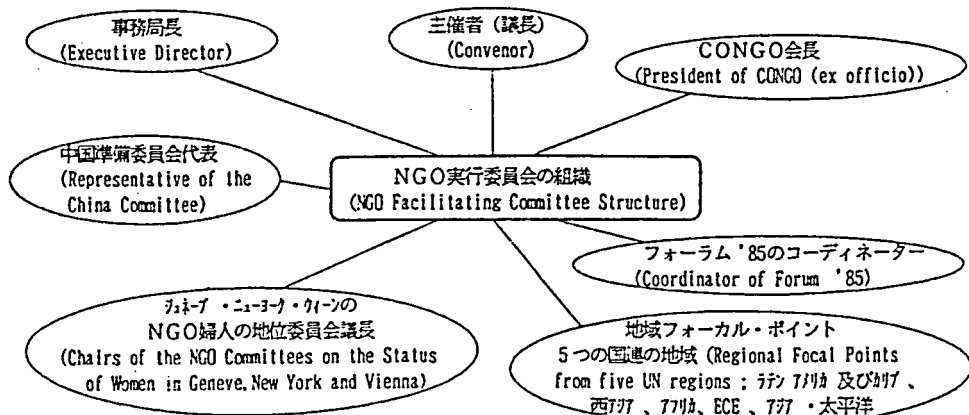
NGO企画委員会は、北京政府間会議に影響を及ぼすとともに、NGOフォーラム '95をオーガナイズするようNGOを方向づける企画諮問機関である。NGOが企画の大筋をまとめることに関与するため、この委員会に入会することが生ずる方法であるので入会に関心のあるすべての団体に「開かれた」ものとなっている。入会費用は、一回払いの50米ドルである。

【 NGO実行委員会 】

NGO実行委員会は、企画委員会の助言と意見に基づき、詳細全体企画をまとめる機関である。NGOフォーラムの主催者（議長）は、企画委員会及び実行委員会の両議長である。実行委員会の組織は下図の通りである。

【 事務局 】

事務局は、企画委員会の全てのメンバーの意見に基づき、実行委員会が行った決定の実施体である。事務局長を頭に、広報担当、コンピュータ/コミュニケーション担当、財政担当により構成される。事務局は、専門知識のあるボランティアからなるプロジェクトチームを組織することを検討中である。



Asia Pacific NGO Working Groupの組織

Asia Pacific NGO Working Groupは、アジア太平洋地域の NGOの代表組織であり、5つの部分より構成される。すなわち、① NGOフォーラム '95の NGO実行委員会の地域フォーカルポイント（2人）、② 6つのtask forceから各1人の代表、③ 5つのサブ地域のコーディネーター、④ 問題領域に関するコーディネーター（12人以上）、⑤ ラボルトゥール2人、⑥ 中国及び ESCAPの代表、である。

①は、Ms. Thanpuying Sumalee

Chartikavanij と Ms. Noeleen Heyzer の2人であり、②は5つの各サブ地域（東アジアなど）1人ずつ計5人ずつで構成され、情報提供、財務などの機能を担う6つのtask forceであり、1人ずつ代表が選ばれる。そして、①と②でCore Groupを組織し、機動的に会合することとなる。③は各サブ地域から、また、④は北京に向け取りまとめられつつあるアジア太平洋地域の行動計画の問題領域に応じて、選出される予定である。

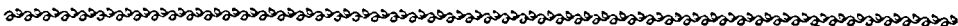
Working Groupは、北京会議の前に3回程度公開の企画会議を開催する予定であり、次回は5～6月にジャカルタの保健会議に向けた戦略を議題として開催する予定である。

（連絡先）

Ms. Sumalee Chartikavanij
Pan Pacific/South East Asia Women's Association International, 2234 New Petchburi Rd., Bangkok 10310 Thailand
Tel. 662 314 4316, Fax: 662 718 0372

第4回世界婦人会議は、男女の関係を規定する社会的、経済的、政治的及び文化的な支配力に焦点を当てると同時に、この地球的事業の時代に、平等の実現した平和な世界の建設のために、如何に男女が共に取り組むかを考えるため、国連が国際社会に提供する機会と言えるでしょう。

(Taken on the Move (第4回世界婦人会議事務局が月刊で発行する広報誌) 創刊号(1994年3月)より抜粋・改訂)



◆ ◆ ◆ 世界婦人会議について ◆ ◆ ◆

ここでは、この世界婦人会議の開催経緯等を紹介する。

世界婦人会議は、1975年を「国際婦人年」とする国連の決定に端を発している。

国連は、従来から、性に基づく差別の禁止を含む国連憲章や世界人権宣言などを採択するとともに、1946年には「婦人の地位委員会」を設置するなど、法律及び事実上の男女平等達成のための努力を進めてきたが、各国における事実上の平等はなかなか確保されるに至らなかった。「国際婦人年」は、このような状況を背景として、第29回国連総会において、婦人の地位向上のために世界的規模の行動を行う年として定められた。

第1回目の世界婦人会議はこの一環として、1975年に開催された。

第1回目の世界婦人会議は、「国際婦人年世界会議」と呼ばれており、1975年6月19日から7月2日まで133か国が参加し、メキシコシティにおいて開催された。この会議においては、「世界行動計画」や「婦人の平等と開発と平和への婦人の寄与に関する1975年のメキシコ宣言」、「国際婦人の十年(1975-1985): 平等・発展・平和の直

北京に向けての準備過程において、変革の力強い担い手かつ指導者としての女性のイメージは、開発活動に女性が意思決定など効果的に参画することを妨げる障害を確実に除去するため、私たちが行動を起こす上で、大変重要なものであります。

また、第4回世界婦人会議は、社会

における女性の低い地位を解消する力として、世界中の女性が、その多様なバックグラウンドを活かす機会となるでしょう。

さらには、あらゆる年齢層の女性にとって、これらの変革を成し遂げるため、男性とのパートナーシップの下に取り組む機会となるでしょう。

言」などが採択されるなど成果をあげた。

第2回目の世界婦人会議は、先の会議において決められた国際婦人の十年の中間年の1980年に7月14日から30日までの間、145か国が参加し、コペンハーゲンで開催され、「国際婦人の十年」中間年世界会議と呼ばれている。この会議においては、「国際婦人の十年後半期行動プログラム」が採択されるとともに、「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」の署名式が行われた。

第3回目の世界婦人会議は、国際婦人の十年最終年である1985年の7月15日から26日まで、ケニアのナイロビにおいて開催され、157か国が参加した。この会議は、「国際婦人の十年」ナイロビ世界会議と呼ばれており、「婦人の地位向上のためのナイロビ将来戦略」が採択された。

今回の第4回世界婦人会議は、以上の合計3度の会議を踏まえ、「ナイロビ将来戦略」採択後十年目の来年初めてアジアで開かれるものである。

第4回世界婦人会議は、1995年9月4日から15日まで北京において開催される。この会議自身は、基本的には国

連主催の政府間の会合であり、国や地域・機関の代表者が出席する。なお、NGOの代表にも国連経済社会理事会の諮問的地位にあるものやその他NGOであっても国連婦人の地位委員会に申請、承認されたものについてはオブザーバーとしての出席が認められる。

また、これと並行して、北京においてNGOの会合である「NGOフォーラム」が、8月30日から9月8日まで開催される。この会合へは、申込みをすることにより自由に参加することができる見込みである。

なお、世界婦人会議のESCAP 地域準備会合であるアジア太平洋第2回「開発と女性」開発会議は、来る6月7日から14日まで、インドネシアのジャカルタで開催され、地域行動計画が採択される予定である。

【次号予告】

NGO フォーラム '95の申込書とワークショップや展示スペースの申込み手続きに関する指針を次号(7月15日発行予定)で紹介するほか、ESCAP 地域準備会合の報告等を掲載する予定である。

民間団体からのお知らせ



【あごら】'95世界婦人会議—北京会議への道—連続講座が始まります。北京会議に参加したいけれど、どうすればよいのか…そんな問い合わせが相次いでいるので、〈あごら〉が、連続講座を始めることとなりました。

全8回で、内容は、国際婦人年や差別撤廃条約がなぜ成立したかという基本的な問題から、メキシコ、コペンハーゲン、ナイロビの3つの世界婦人会議の状況、リオ、ウィーン、マニラ、カイロ会議等の国際的な流れ、アジアと日本の位置、北京会議の準備状況など。3つの世界会議に参加した〈あごら〉のノウハウも提供します。

第1回は、6月21日(火)

第2回は、7月20日(水)

松井やより氏、深尾凱子氏らを講師に予定、10月には、中国のNGO会議責任者を招きます。

全8回で7,000円。会場は、虎ノ門の国立教育会館会議室。

申し込み先は、〈あごら〉〒160

東京都新宿区新宿1-9-4-308

FAX 03-3354-9014

☎ 03-3354-3941

「住職」を追われた女住職

●発行 1994年 7月10日

●編集 あごら大阪

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-4-303 中公ビル

●03-3354-3941 ●03-3354-9014(FAX) ●振替00100-0-5264

●発行人 あごら企画会議 定価 948円(920円+税28円)

この ひろい宇宙に
たった一つの地球

その 大きな地球に
たった一人のわたし
そして あなた

かけがえのない地球
かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから
たいせつに たいせつに しよう

あなたも
わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だれもが だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

へあーらー

人と人のお会うひろば

へあーらー

人と人の共に生きるひろば